

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野
東京大学医学部家族看護学教室

年報 (第7号)

平成17年4月～平成19年3月

訃報

名誉教授 杉下知子先生が
平成 19 年 3 月 29 日にご逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を捧げます。

東京大学医学部家族看護学教室

ご略歴

昭和 41 年	東京大学医学部保健学科卒業
昭和 46 年	東京大学医学系研究科（保健学博士）修了 東京大学医学部助手（母子保健学講座）
昭和 49～51 年	ロンドン大学聖トマス病院医科大学客員研究員 （臨床ウイルス学講座）
平成元年	東京大学医学部講師（母子保健学講座）
平成 4 年	東京大学医学部教授（家族看護学講座）
平成 11～13 年	東京大学医学部健康科学・看護学科長
平成 15 年	東京大学名誉教授 三重県立看護大学教授（基礎看護学）
平成 17 年	三重県立看護大学学長
専門分野	家族看護学・感染看護学
表彰	イスクラ厚生事業団研究奨励賞（昭和 55 年） 第 7 回国際家族看護学会賞（平成 17 年）

目次

はじめに

1. 教育活動

1-1. 担当講義・実習 2

1-2. 卒業論文・修士論文・博士論文 4

2. 研究活動

2-1. 研究費 5

2-2. 学術研究業績 7

2-3. 学内外の公的活動 21

3. 教室カンファレンス 23

4. 家族看護学教室研究会

4-1. 家族看護学研究会 38

4-2. 家族ケア症例研究会 39

5. 家族ケアフォーラム 40

6. 「質的研究—修正版 GT 法」勉強会 41

7. 教室の沿革 44

8. 追悼文 45

9. 資料 46

家族看護学教室 教室員（平成 17 年度～平成 18 年度）

はじめに

家族看護学教室年報の第7号が出来上がりました。健康科学・看護学専攻内外の諸先輩方のご指導のもと、平成17年度、平成18年度を無事終えることができましたことを、ご報告し、お礼申し上げます。ありがとうございました。

東京大学は平成16年度に、国立大学法人東京大学になりましたが、その後の短い間に、健康科学・看護学科(専攻)にもいくつかの機構変革がありました。健康科学・看護学科のスタートと共に平成4年度に開始された、編入学制度、および保健学科時代の卒業生が看護学コースに再入学する学士入学制度が、平成17年度入学生入試をもって廃止となりました。平成18年度より、看護学大講座が、予防看護学講座と臨床看護学講座とに組み分けされ、当教室は「健康科学・看護学専攻 予防看護学講座 家族看護学分野」になりました。さらに、「保健師コース・看護師コース」と呼ぶ、修士課程での学びを臨床に持ち帰ることを第一の目標に掲げる大学院を新設し、当教室では「家族心理看護」というユニットを開設しました。そして平成19年度には、健康科学コースと社会医学専攻を母体とした「公共健康医学専攻専門職修士学位課程(MPH1年コース、2年コース)」がスタートします。急速に変化する時代のニーズに応えながら、諸先輩が築いてこられた「学」を育み続けることの責任を、切に感じるこの頃です。

さて、平成15年度に開始いたしました「家族ケア症例研究会」および「家族ケアフォーラム」は、すっかり軌道にのって定着しています。附属病院をはじめ、近隣の病院や保健福祉センター、訪問看護ステーションなど、さまざまな臨床で活躍している方々や、学内外の院生さん、学生さんの参加をみえています。「家族ケア」の実践・普及に努めている教室の卒業生が、症例や活動の呈示をしてくれるのも、たいへん嬉しいことです。

この2年間に当教室に所属して学位を授与された者は、学士3名(相場繁君、村上慶子君、中村奈央君)、修士4名(上野里絵君、岡崎佳織君、小林京子君、長谷川美由紀君)、博士2名(涌水理恵君、近藤佳代子君)です。おめでとうございます。

業績数には浮き沈みがあり、かならずしも十分ではありませんが、教室員一同、励んでおります。どうぞ今後とも、当教室へのご理解と、ご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

平成19年3月

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野

助教授 上別府 圭子

1. 教育活動

1-1. 担当講義・実習

平成 17 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

[学部]

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
看護学の基礎 と展開	教養学部総合科目 D 人間・環境一般	2	1・2	前期	木	16:20~17:50
看護実践活動 入門	全学自由研究 ゼミナール	1	1・2	夏休み 集中講義	月~木	9:00~16:10
健康科学・看護学 概論	必修	2	2	後期 I・II	火	9:00~10:30
病態生理免疫学	必修	1	3	前期 II - 3	木	9:00~12:10
総合看護学	編入生選択	2	3	後期 I	水	13:00~17:50
小児看護学	看護必修	分 2	3	後期 I - 2	月 木	9:00~12:10 16:20~17:50
家族看護学	看護必修、選択	2	3	後期 II	火	13:00~16:10
小児看護学	看護必修	分 2	4	前期 II	月 火	9:00~17:50 13:00~17:50
小児看護学実習	看護必修	2	4	後期	月~金	8:00~15:00

※ 開講時期

前期 I	4 月 4 日 ~ 5 月 27 日	8 週
前期 II	5 月 30 日 ~ 7 月 15 日	7 週
前期 III	8 月 29 日 ~ 10 月 14 日	7 週
後期 I	10 月 17 日 ~ 12 月 2 日	7 週
後期 II	12 月 5 日 ~ 2 月 3 日	7 週
後期 III	2 月 6 日 ~ 3 月 10 日	4 週

[大学院]

家族看護学特論 I	4 月~7 月
家族看護学特論 II	10 月~12 月

平成 18 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
看護学の基礎 と展開	教養学部総合科目 D 人間・環境一般	2	1・2	前期	木	16:20~17:50
看護実践活動 入門	全学自由研究 ゼミナール	1	1・2	夏休み 集中講義	火~金	9:00~16:10
健康科学・看護学 概論	必修	2	2	後期Ⅰ・Ⅱ	火	9:00~10:30
病態生理免疫学	必修	1	3	前期Ⅱ-3	木	9:00~12:10
小児看護学	看護必修	分2	3	後期Ⅰ-2	月	9:00~12:10
家族看護学	看護必修、選択	2	3	後期Ⅱ	火	13:00~16:10
小児看護学実習	看護必修	1	3	後期Ⅲ	月~金	9:00~16:00
小児看護学	看護必修	分2	4	前期Ⅱ	月 木	9:00~16:10 9:00~12:10
小児看護学実習	看護必修	2	4	後期	月~金	8:00~15:00

※ 開講時期

前期Ⅰ	4月3日	~	5月26日	8週
前期Ⅱ	5月29日	~	7月14日	7週
前期Ⅲ	8月28日	~	10月13日	7週
後期Ⅰ	10月16日	~	12月1日	7週
後期Ⅱ	12月4日	~	2月2日	7週
後期Ⅲ	2月5日	~	3月9日	4週

[大学院]

家族看護学特論Ⅰ	4月~7月
家族看護学特論Ⅱ	10月~1月

1 - 2. 卒業論文・修士論文・博士論文

平成 17 年度

修士論文

上野里絵：

精神疾患を有する人の「親になること」に関する研究 ―病いと子育てについての女性のナラティブからの質的分析―

岡崎佳織：

在宅で子どもの医療的ケアを行う母親の経験に関する質的研究

小林京子：

PedsQL (Pediatric Quality of Life Inventory 4.0)日本語版の開発

平成 18 年度

卒業論文

相場繁：

両親によるサポートが高校生の抑うつに与える影響

村上慶子：

保育園における保健活動と看護職の役割

修士論文

長谷川美由紀：

看護師の二次的外傷性ストレスと関連要因

博士論文

近藤佳代子：

Development of a questionnaire measuring quality of life in primary caregivers of children with atopic dermatitis (QPCAD) (アトピー性皮膚炎患児の主たる養育者に特異的な健康関連 Quality of Life 尺度の開発)

涌水理恵：

The Effects of At-Home Preparation Program for Surgery and Hospitalization on Adjustment and Anxiety for Japanese Preschool Children and Caregivers: A Randomized Controlled Trial (入院・手術のための家庭での心理的準備プログラムが日本の就学前の子どもと保護者の適応と不安に及ぼす効果：ランダム化比較試験による検討)

2. 研究活動

2-1. 研究費

平成16年度,平成17年度,平成18年度文部科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)「小児がんサバイバーと家族における晩期障害の実態と学際的介入プログラムの開発」(課題番号16390635) 12,100千円

上別府圭子, 星順隆(平成16年度), 井田孔明, 滝田順子, 尾関志保(平成16,18年度), 小林京子(平成18年度)

平成17年度厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究事業「育児機能低下と乳児虐待の評価パッケージの作成と、それを利用した助産師と保健師による母親への介入のための教育と普及」 3,240千円

吉田敬子, 鈴宮寛子, 江井俊秀, 上別府圭子, 山下洋.

平成17年度 (財)メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金「次世代育成に関わる者のメンタルヘルス(その2)精神疾患を有する女性が『親になること』に関する研究」 400千円

上別府圭子, 上野里絵, 牛島定信

平成18年度 (財)メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金「次世代育成に関わる者のメンタルヘルス(その3)看護師の二次的外傷性ストレスに関する研究」 500千円

上別府圭子, 長谷川美由紀, 松岡豊.

平成18年度 厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究事業「育児機能低下と乳児虐待の評価パッケージの作成と、それを利用した助産師と保健師による母親への介入のための教育と普及」 2,268千円

吉田敬子, 鈴宮寛子, 江井俊秀, 上別府圭子, 山下洋.

平成18年度,平成19年度,平成20年度文部科学研究費補助金 基盤研究(C)「家族形成過程における家族機能に影響する要因の概念モデル構築」(課題番号18592344) 3,500千円

山崎あけみ, 上別府圭子

平成17年度,平成18年度文部科学研究費補助金(若手研究(A))「痴呆性高齢者グループホーム入居が利用者とその家族に与える影響に関する研究」(研究課題番号17689060) 7,950千円

松井典子

平成17年度(第15回)公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金「外科的小手術を受ける幼児への Psychological preparation program 介入の有効性の検討」 1,000千円

涌水理恵

財団法人在宅医療助成勇美記念財団平成17年度在宅医療助成金「医療的ケアを必要とする児の家

族の経験—在宅療養移行に関する質的研究— 850 千円

岡崎佳織, 上別府圭子, 金森豊, 箕輪秀子

2 - 2. 学術研究業績

論文(原著論文・総説)

Kamibeppu, K.: Reconsideration of "Motherhood" in contemporary Japan, *The American Journal of Psychoanalysis*, 65 (1), 13-29, 2005.

Kamibeppu, K., Sugiura, H.: Impact of the mobile phone on junior high-school students' friendship in the Tokyo metropolitan area, *CyberPsychology and Behavior*, 8 (2), 121-130, 2005.

Yamazaki, A., Lee, K., Kennedy, H., Weiss, J.: Sleep-wake cycles, social rhythms, and sleeping arrangement during Japanese childbearing family transition. *JOGNN: Journal of Obstetric, Gynecologic, and Neonatal Nursing*, 34(3), 342-348, 2005.

Yamazaki, A., Lee, K., Kennedy, H., Weiss, S.: Parent chronotypes and sleeping and crying/fussing in 4-5 week infants, *Sleep and Biological Rhythms*, 3(3), 158-161, 2005.

Yamazaki, A.: Family Synchronizers: Predictors of sleep-wake rhythm for Japanese first-time mothers. *Sleep and Biological Rhythms*, 2007 (in press).

Kondo, K., Yamazaki, Y.: Living with facial disfigurement: Stigmatizing situations, coping strategies and their influence on psychological well-being, *Japanese Journal of Health and Human Ecology* 71(4), 142-156, 2005.

Wakimizu, R., Ozeki, S., Kamibeppu, K.: Psychological distress and related factors during hospitalization among young patients undergoing minor surgery in a Japanese suburban hospital. *Japanese Journal of Research in Family Nursing*, 12(3), 112-124, 2007.

Fukahori, H., Matsui, N., Mizuno, Y., Yamamoto-Mitani, N., Sugai, Y., Sugishita, C.: Factors Related to Family Visits to Nursing Home Residents in Japan. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 2007 (in press).

上別府圭子: 子ども時代の健康障害に関連した医療PTSDとその予防的介入, *小児看護*, 28(9), 1233-1239, 2005.

上別府圭子: 総合病院における臨床心理士-コンサルテーション・リエゾン活動に焦点を当てて, *臨床心理学*, 6(1), 14-19, 2006.

上別府圭子: 看護とサイコセラピー, *日本サイコセラピー学会雑誌*, 6(1), 18-25, 2006.

上別府圭子, 佐藤伊織, 星 順隆: 同胞を小児がんで亡くした青年の語り—研究法としてのナラティブ.
臨床描画研究 21: 13-27, 2006.

上別府圭子, 池田真理: 看護面接の上達法, *精神科臨床サービス*, 6(3), 291-295, 2006.

上別府圭子: 小児がんと PTSD, *小児看護*, 29(12), 1637-1641, 2006.

上別府圭子, 山下洋, 栗原佳代子, 鈴宮寛子, 江井俊秀, 吉田敬子: 地域保健スタッフの母子精神保健活動を支援する研修の評価, *小児保健研究*, 66(2), 2007 (in press) .

山崎あけみ: 生まれたばかりの家族を育てるケア—単位の家族にかかわるヒント—第 1 回, *Neonatal Care*, 19(9), 871-875, 2006.

山崎あけみ: 生まれたばかりの家族を育てるケア—単位の家族にかかわるヒント—第 2 回, *Neonatal Care*, 19(10), 973-977, 2006.

山崎あけみ: 生まれたばかりの家族を育てるケア—単位の家族にかかわるヒント—第 3 回, *Neonatal Care*, 19(11), 1073-1077, 2006.

山崎あけみ: 生まれたばかりの家族を育てるケア—単位の家族にかかわるヒント—第 4 回, *Neonatal Care*, 19(12), 1169-1173, 2006.

山崎あけみ: 生まれたばかりの家族を育てるケア—単位の家族にかかわるヒント—第 5 回, *Neonatal Care*, 20(1), 51-56, 2007.

山崎あけみ: 生まれたばかりの家族を育てるケア—単位の家族にかかわるヒント—第 6 回, *Neonatal Care*, 20(2), 147-152, 2007.

山崎あけみ: 生まれたばかりの家族を育てるケア—単位の家族にかかわるヒント—第 7 回, *Neonatal Care*, 20(3), 301-306, 2007.

松井典子, 須貝佑一: 我が国における施設高齢者の転倒事故に関する文献的検討—痴呆性高齢者の転倒事故防止対策構築への考察—, *日本老年精神医学雑誌*, 17(1), 65-74, 2006.

近藤佳代子, 遠藤雄一郎, 藤田政博: 顔の異形が当事者にもたらす心理社会的影響に関する文献的考察, *日本健康教育学会誌*, 13(2), 60-67, 2005.

深堀 浩樹, 須貝 佑一, 水野 陽子, 松井 典子, 杉下 知子: 特別養護老人ホーム入所者の家族介護者における精神的健康とその関連要因, *公衆衛生学雑誌*, 52(5), 399-410, 2005.

通水理恵, 尾関志保, 上別府圭子: 外科的小手術を受けた子どもの退院後の心理的混乱およびその関連要因, *日本看護科学会誌*, 25(3), 75-82, 2005.

通水理恵, 上別府圭子: 日本の小児医療におけるプレパレーションの効果に関する文献的考察, *日本小児看護学会誌*, 15(2), 82-39, 2006.

通水理恵, 上別府圭子: オリエンテーションビデオを用いた家庭でのプレパレーションが手術を受ける幼児に与える効果: ランダム化比較試験による検討. *医療と社会*, 16(2), 183-202, 2006.

通水理恵, 黒木春郎, 五十嵐正紘: 小児プライマリ・ケアにおける医師・患者関係に関する文献的考察, *外来小児科*, 9(1), 24-32, 2006.

恩田清美, 上別府圭子, 杉本陽子: 小児がんのターミナル期の在宅療養における母親の体験—家族内サブシステムの関係に焦点をあてて—, *日本小児看護学雑誌*, 15(2), 39-45, 2006.

坂根綾子, 大森唯起子, 木本諭子, 門田直子, 森谷美智子, 松井典子: 都市部に居住する一般女性の更年期症状に対する医療機関受診の関連要因, *日本更年期医学会雑誌*, 14(1), 27-35, 2006.

坂根綾子, 大森唯起子, 木本諭子, 門田直子, 森谷美智子, 松井典子: 都市部に居住する一般女性の更年期症状に対するライフスタイルの改善に影響する要因, *更年期と加齢のヘルスケア研究会誌*, 5(1), 56-62, 2006.

須貝佑一, 小林奈美, 杉山智子, 松井典子: 【高齢者ケアにおけるリスクマネジメント】 高齢者の転倒・骨折とリスクマネジメント, *老年精神医学雑誌*, 17(9), 951-958, 2006.

熊井秋穂, 佐伯薫, 下田和恵, 高橋美帆, 兵庫千夏, 喜多里巳, 野田蓮子, 一瀬いつ子, 村上睦子, 松井典子: 分娩直後のカンガルーケアが生後一ヶ月時での母乳栄養継続率に及ぼす影響, *母性衛生*, 46(4), 649-654, 2006.

山下美緒, 高橋まなみ, 溝口直子, 染谷淑子, 太田垣美保, 森谷美智子, 松井典子: WOCN が実施する人工肛門造設患者の性に関する指導: 患者の性別による検討, *母性衛生*, 47(4), 539-546, 2007

谷野祐子, 大塚志乃ぶ, 朝比奈七緒, 小野恵美, 藤井美穂子, 森谷美智子, 松井典子: 父親に対する育児指導が母子退院1か月後の父親の育児参加に与える影響, *母性衛生*, 2007(印刷中).

長田洋和, 上野里絵: ネット中毒をめぐって—Internet Addiction Test (IAT) 日本語版について, アディクションと家族, 22(2), 141-147, 2005.

長田洋和, 上野里絵: 日本版インターネットアディクションテスト (JIAT) の有用性の検討, アディクションと家族, 22(3), 269-275, 2005.

著書・編著・教科書ほか

上別府圭子: 家族看護における心理教育的アプローチ, p 127-138 / 亀口憲治編: 現代のエスプリー—家族療法の現在 No. 451, 至文堂, 2005.

上別府圭子: 精神科看護における家族アセスメントの留意点 p68-69 / 坂田三允総編集: 精神看護エキスパート 11 精神看護と家族ケア, 中山書店, 2005.

上別府圭子: 家族療法の種類, p72-77 / 坂田三允総編集: 精神看護エキスパート 11 精神看護と家族ケア, 中山書店, 2005.

上別府圭子: ナラティブ・アプローチ, p78-80 / 坂田三允総編集: 精神看護エキスパート 11 精神看護と家族ケア, 中川書店, 2005.

上別府圭子: 病名の告知と家族, p81-83 / 坂田三允総編集: 精神看護エキスパート 11 精神看護と家族ケア, 中川書店, 2005.

上別府圭子: 家族心理教育と家族教室, p84-91 / 坂田三允総編集: 精神看護エキスパート 11 精神看護と家族ケア, 中川書店, 2005.

上別府圭子, 小林京子: こどものターミナルケアにおける家族看護とリエゾン看護, p225-230 / 坂田三允総編集: 精神看護エキスパート 12 こどもの精神看護, 中川書店, 2005.

上別府圭子: 移行対象(過渡対象), p501 / 乾吉佑他編: 心理療法ハンドブック, 創元社, 2005.

上別府圭子: バリント, p578-579 / 乾吉佑他編: 心理療法ハンドブック, 創元社, 2005.

尾関志保: フリードマン家族アセスメントモデル, p53-58 / 坂田三允総編集: 精神看護エキスパート 11 精神看護と家族ケア, 中山書店, 2005.

杉浦仁美, 上別府圭子: ジェノグラム(家系図)をコマップ, p50-52 / 坂田三允総編集: 精神看護エキスパート 11 精神看護と家族ケア, 中山書店, 2005.

上別府圭子: うつ病患者の日常生活指導はどうすればいいの?, p54-55 / 上島国利・平島奈津子編, 全科に必要な精神的ケア Q&A-これでトラブル解決! ナーシングケア Q&A, 9, 総合医学社, 2006.

上別府圭子: チーム医療での看護師の役割って何?, p240-241 / 上島国利・平島奈津子編, 全科に必要な精神的ケア Q&A-これでトラブル解決! ナーシングケア Q&A, 9, 総合医学社, 2006.

上別府圭子: ケースカンファレンスってどのようにするの?, p242-243 / 上島国利・平島奈津子編, 全科に必要な精神的ケア Q&A-これでトラブル解決! ナーシングケア Q&A, 9, 総合医学社, 2006.

上別府圭子: 領域と研究法 ③-家族, p148-168 / 齋藤高雅編, 臨床心理学研究法特論, (財)放送大学教育振興会, 2006.

上別府圭子: 摂食障害の家族会で実施したバウムテストから、母親を心理療法へ導入した症例, p140-142 / 氏原寛, 岡堂哲雄, 亀口憲治, 西村洲衛男, 馬場禮子, 松島恭子編: 心理査定実施ハンドブック I-4 家族臨床, 創元社, 2006.

上別府圭子: 防御機制, p66-67 / 加藤伸司, 中島健一編著: 新・社会福祉士養成テキストブック 13「心理学」, ミネルヴァ書房, 2007.

上別府圭子: 動機づけ, p68-69 / 加藤伸司, 中島健一編著: 新・社会福祉士養成テキストブック 13「心理学」, ミネルヴァ書房, 2007.

上別府圭子: 感情・情緒, p70-71 / 加藤伸司, 中島健一編著: 新・社会福祉士養成テキストブック 13「心理学」, ミネルヴァ書房, 2007.

上別府圭子: 来談者中心療法, p180-185 / 加藤伸司, 中島健一編著: 新・社会福祉士養成テキストブック 13「心理学」, ミネルヴァ書房, 2007.

上別府圭子, 上野理絵: 臨床心理士の役割, p150-154 / 谷岡哲也, 眞野元四郎, 山崎正雄, 上野修一編: 精神科リハビリテーション, 中外医学社, 2007.

藤岡寛, 上別府圭子: 子どもの死の概念, 日本医療保育学会医療保育テキスト編集委員会編 / 医療保育テキスト, 日本医療保育学会, 2007 (in press) .

藤岡寛, 上別府圭子: 死の気づき、死の受容, 日本医療保育学会医療保育テキスト編集委員会編 / 医療保育テキスト, 日本医療保育学会, 2007 (in press) .

栗原佳代子, 尾関志保: 死にゆく子どもの社会関係, 日本医療保育学会医療保育テキスト編集委員会編 / 医療保育テキスト, 日本医療保育学会, 2007 (in press) .

尾関志保, 栗原佳代子: 遺族と友達, 日本医療保育学会医療保育テキスト編集委員会編 / 医療保育テキスト, 日本医療保育学会, 2007 (in press) .

研究班会議・報告書など

平成13年度, 平成14年度, 平成15年度文部科学研究費補助金(基礎研究(B)(1))「在宅病児・障害児と家族を対象とした地域連携型継続看護システムの実践モデル開発」(研究課題番号 13470533)
12,100 千円

研究代表者: 杉下知子, 研究分担者: 村田恵子, 鳥居央子, 大脇万起子, 林邦彦, 法橋尚宏, 上別府圭子, 研究協力者: 池田亜希子, 涌水理恵, 尾関志保, 2005.

外科的小手術を受ける幼児へのプリパレーションに関する研究完了報告書(財団法人医療科学研究所研究助成:

研究代表者: 涌水理恵, 研究分担者: 上別府圭子

平成15年度, 平成16年度文部科学研究費補助金(基礎研究(A)(2))「看護情報の活用を通じた看護の質の向上に関する研究」(研究課題番号 15209072)

研究代表者: 菅田勝也, 研究分担者: 数間恵子, 大江和彦, 河正子, 春名めぐみ, 美代賢吾, 杉下知子, 上別府圭子, 綿貫成明, 柏木公一, 佐々木美奈子, 武村雪絵, 村嶋幸代, 大内尉義, 萱間真美, 永田智子, 2006.

平成17年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)「育児機能低下と乳児虐待の評価パッケージの作成とそれを利用した助産師・保健師による母親への介入のための教育と普及に関する研究」

研究代表者: 吉田敬子, 分担研究者: 山下洋, 鈴宮寛子, 上別府圭子, 江井俊秀, 研究協力者: 栗原佳代子, 2006.

平成15年度, 平成16年度文部科学研究費補助金(基礎研究(A)(2))「看護情報の活用を通じた看護の質の向上に関する研究」(研究課題番号 15209072)

研究代表者: 菅田勝也, 研究分担者: 数間恵子, 大江和彦, 河正子, 春名めぐみ, 美代賢吾, 杉下知子, 上別府圭子, 綿貫成明, 柏木公一, 佐々木美奈子, 武村雪絵, 村嶋幸代, 大内尉義, 萱間真美, 永田智子, 2006.

上別府圭子, 杉浦仁美, 中嶋一憲: 次世代育成に関わる者のメンタルヘルス(その1)抑うつを経験した

中学校教師の相談の実態と相談に影響する要因について：東京都の場合，(財)メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告集 2005 年度，第 17 号：43-50，2005.

岡崎佳織，上別府圭子，金森豊，箕輪秀子：医療的ケアを必要とする児の家族の経験-在宅療養移行に焦点を当てて-，2005(平成 17)年度在宅医療助成完了報告書.

学会・研究発表

Kamibeppu, K.，Kobayashi, K.：Depressive symptoms among children and adolescents in the Tokyo metropolitan area, 17th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Sep 10-14, 2006, Melbourne, Australia.

Yamazaki, A.，Mitamura, N.：Case study: How a family spends time from IUFD notification to stillbirth, 9th SIDS International Conference, June 1-4, 2006, Yokohama, Japan.

Yamazaki, A.，Mitamura, N.：Case study: Feelings that parents who experience stillbirth cannot share, 9th SIDS International Conference, June 1-4, 2006, Yokohama, Japan.

Ikeda, T.，Nakata, A.，Hojo, M.，Kamibeppu, K.，Nishikido, N.，Sugishita, C.：Correlates of depressive symptoms in employers or employer's families at small and medium-scale enterprises in Japan, The 3rd International Conference on Community Health Nursing Research, Sept 30-Oct 2, 2005, Tokyo, Japan.

池田智子，中田光紀，北條稔，高橋正也，原谷隆史，錦戸典子，上別府圭子，杉下知子：小規模事業場労働者の抑うつに関連要因-2地域における分析-，第 78 回日本産業衛生学会，2005 年 4 月 21-23 日，東京都港区.

涌水理恵，上別府圭子：外科的小手術を受ける子どもと保護者の入院中の心理的混乱とその関連要因，第 15 回日本外来小児科学会年次集会，2005 年 8 月 20-21 日，大阪府大阪市.

松井典子，木村一秋，水野陽子：娘介護者が母親の在宅介護終止に至るプロセスと入居後の新たな関係構築(第二報)，第6回日本認知症ケア学会大会，2005年10月1-2日，島根県松江市.

木本諭子，坂根綾子，大森唯起子，門田直子，森谷美智子，松井典子：地域に居住する女性の更年期の地域サービス利用に影響する要因，第46回日本母性衛生学会総会，2005年10月6-7日，宮崎県宮崎市.

大森唯起子，坂根綾子，木本諭子，門田直子，森谷美智子，松井典子：地域に居住する女性の更年期症

状に関する実態調査, 第46回日本母性衛生学会総会, 2005年10月6-7日, 宮崎県宮崎市.

谷野祐子, 大塚志乃ぶ, 朝比奈七緒, 小野恵美, 藤井美穂子, 森谷美智子, 松井典子: 早期新生児期における父親への育児指導が母子退院1か月後の父親の育児参加に与える影響, 第46回日本母性衛生学会総会, 2005年10月6-7日, 宮崎県宮崎市.

相澤美恵子, 池田里美, 福田ありさ, 森谷美智子, 松井典子: 我が国における家庭における性教育に関する文献的考察, 第46回日本母性衛生学会総会, 2005年10月6-7日, 宮崎県宮崎市.

井口幸千代, 奥野直子, 森谷美智子, 松井典子: 妊婦の求めるバースプラン記入用紙の検討, 第46回日本母性衛生学会総会, 2005年10月6-7日, 宮崎県宮崎市.

恩田清美, 杉本陽子, 上別府圭子: 子どもの在宅ターミナル期における学校問題, 第52回日本小児保健学会, 2005年10月6-8日, 山口県下関市.

恩田清美, 杉本陽子, 上別府圭子: 子どもの在宅ターミナル期における家族の必要な情報と相談相手および協力者, 第52回日本小児保健学会, 2005年10月6-8日, 山口県下関市.

坂根綾子, 大森唯起子, 木本諭子, 門田直子, 森谷美智子, 松井典子: 都市部に居住する一般女性の更年期症状に対する受療行動の関連要因, 第20回日本更年期医学会学術集会, 2005年11月12-13日, 埼玉県さいたま市.

瀬戸屋希, 林(栃井) 亜希子, 萱間真美, 宮本有紀, 松下太郎, 船越明子, 上野里絵, 山口亜紀, 沢田秋, 福田敬: 精神科訪問看護の効果とケア内容に関する研究 第1報—精神科訪問看護開始前後における精神科入院日数の変化と利用者の状況—, 第25回日本看護科学学会学術集会, 2005年11月18-19日, 青森県青森市.

林亜希子, 瀬戸屋希, 萱間真美, 宮本有紀, 船越明子, 松下太郎, 沢田秋, 山口亜紀, 上野里絵, 福田敬: 精神科訪問看護の効果とケア内容に関する研究 第2報—精神科訪問看護開始後2年間における訪問看護中断歴とその関連要因—, 第25回日本看護科学学会学術集会, 2005年11月18-19日, 青森県青森市.

上別府圭子: 母子精神保健にたずさわるスタッフへのマニュアルを用いた研修による効果に関する研究, 平成17年度厚生労働科学研究費補助金 吉田研究会議, 2006年1月28日, 東京都.

恩田清美, 杉本陽子, 上別府圭子: ターミナル期を在宅で過ごす小児がんの子どものかょうだいの現状～母親の語りから～, 第21回日本小児がん学会, 2005年11月26-27日, 栃木県宇都宮市.

上野里絵, 上別府圭子, 岩谷泰志, 山下喜弘, 橋詰紀和子, 江口重幸, 藤村尚宏, 牛島定信: 精神疾患を有する女性の「親になること」に関する質的研究, 第7回日本サイコセラピー学会, 2006年2月4-5日, 東京都杉並区.

中里百恵, 小野寺久恵, 柴野恭子, 近藤佳代子, 宮路由美子, 根本万里子, 早野五十鈴, 小嶋奈々子: 本人の意志を尊重した在宅死の1事例を振り返って, 第8回日本在宅医学会大会, 2006年2月11-12日, 千葉県浦安市.

岡崎佳織, 上別府圭子: 在宅で子どもの医療的ケアを行う母親がその子なりの自立を考えるようになるまでの経験に関する質的研究, 第9回千葉小児看護勉強会, 2006年3月5日, 千葉県千葉市.

上別府圭子: 母子精神保健にたずさわるスタッフへのマニュアルを用いた研修による効果に関する研究, 平成17年度厚生労働科学研究費補助金 吉田研究班会議, 2006年1月28日, 東京都.

上野里絵, 上別府圭子, 岩谷泰志, 山下喜弘, 橋詰紀和子, 江口重幸, 藤村尚宏, 牛島定信: 精神疾患を有する女性の「親になること」に関する質的研究, 第7回日本サイコセラピー学会, 2006年2月4-5日, 東京都杉並区.

中里百恵, 小野寺久恵, 柴野恭子, 近藤佳代子, 宮路由美子, 根本万里子, 早野五十鈴, 小嶋奈々子: 本人の意志を尊重した在宅死の1事例を振り返って, 第8回日本在宅医学会大会, 2006年2月11-12日, 千葉県浦安市.

岡崎佳織, 上別府圭子: 在宅で子どもの医療的ケアを行う母親がその子なりの自立を考えるようになるまでの経験に関する質的研究, 第9回千葉小児看護勉強会, 2006年3月5日, 千葉県千葉市.

松本順子, 佐々木恵, 竹内三保子, 中澤景子, 森谷美智子, 萩原直美, 松井典子: 卒乳に関する文献研究, 第24回東京母性衛生学会学術集会, 2006年5月21日, 東京都世田谷区.

岡崎佳織, 箕輪秀子, 上別府圭子: 在宅で子どもの医療的ケアを行う母親がその子なりの自立を考えるまでの経験に関する質的研究, 日本小児看護学会第16回学術集会, 2006年7月29-30日, 神奈川県横浜市.

山崎あけみ, 三田村七福子: 周産期の死を体験した生殖家族についての質的研究, 日本家族看護学会第13回学術集会, 2006年9月2-3日, 広島県広島市.

小林京子, 上別府圭子: 小児健康関連 Quality of Life 尺度日本語版の開発-Pediatric Quality of Life

Inventory 4.0 Generic Core Scales-, 日本家族看護学会第 13 回学術集会, 2006 年 9 月 2-3 日, 広島県広島市.

上野里絵, 上別府圭子: 精神疾患を有する母親の子育てに関する質的研究—母と子のダイナミズムに焦点をあてて—, 日本精神衛生学会第 22 回大会, 2006 年 10 月 27-28 日, 千葉県千葉市.

川村美香子, 佐藤千春, 石川美希, 中野恵子, 萩原直美, 森谷美智子, 松井典子: 経産婦の育児不安に関する文献的検討, 第 47 回日本母性衛生学会総会, 2006 年 11 月 9-10 日, 愛知県名古屋市.

尾関志保, 上別府圭子, 井田孔明, 星順隆: 小児がん治療中の子どもと家族が症状に対して用いる対処方法に関する研究, 第 22 回日本小児がん学会, 2006 年 11 月 25-26 日, 大阪府大阪市.

涌水理恵, 上別府圭子: VTRを用いた家庭でのプレパレーションが小手術を受ける幼児に与えた効果: ランダム化比較試験による検討, 第 26 回日本看護科学学会学術集会, 2006 年 12 月 2-3 日, 兵庫県神戸市.

長谷川美由紀, 西大輔, 松岡豊, 菊池志津子, 上別府圭子: 看護師の二次的外傷性ストレスと関連要因, 日本トラウマティック・ストレス学会, 2007 年 3 月 9-10 日, 東京都西東京市.

講演・シンポジウムなど

Blair, P., Yamazaki, A. (Chair): 9th SIDS International Conference, “SIDS scientific program (free papers) Epidemiology Health Professional” June 1-4, 2006, Yokohama, Japan.

上別府圭子: 家族のライフサイクルとメンタルヘルス, 第 29 回健康指導研修会, (社)日本医学協会, 2005 年 7 月 23 日, 東京都.

上別府圭子: 考えてみよう家族援助, 第 19 回こどもの城保育セミナー, (財)児童育成協会, 2005 年 8 月 6 日, 東京都.

上別府圭子: 保護者とのコミュニケーション, 第 19 回こどもの城保育セミナー, (財)児童育成協会, 2005 年 8 月 6 日, 東京都.

上別府圭子: 女性のための健康相談・カウンセリング的演習, 健やか親子 21 平成 17 年度「女性の健康エクササイズセミナー」, (社)全国保健センター連合会, 2005 年 8 月 16 日, 東京都.

上別府圭子 (アドバイザー): 産後の母親のメンタルヘルスと育児支援セミナー, 平成 17 年度厚生労働科学研究班(子ども家庭総合研究事業), 「育児機能低下と乳児虐待の評価パッケージの作成と、それを

利用した助産師と保健師による母親への介入のための教育と普及」, 2005年8月18-19日, 東京都.

上別府圭子: 子どもと医療 PTSD, 子どもの心を考える庄内の会, 2005年8月28日, 山形県鶴岡市.

上別府圭子: 母子精神保健にたずさわるスタッフへの教育研修とその効果について, 日本子ども虐待防止学会第11回学術集会・北海道大会 分科会(シンポジウム)「産後うつ病スクリーニングを虐待防止にどう活かすか」, 2005年9月3-4日, 北海道札幌市.

上別府圭子: 同胞を小児がんで亡くした青年の語りー研究法としてのナラティブ, 日本描画テスト・描画療法学会 第15回大会 シンポジウム「ナラティブアプローチと描画」, 2005年9月17-18日, 宮城県仙台市.

上別府圭子, 小林京子: 小児がんサバイバーと家族における晩期障害の実態と学際的介入プログラムの開発, 第3回長期フォローアップガイドライン共同研究, 2006年1月15日, 東京都.

上別府圭子: (司会) 宮本 看護とサイコセラピーー私的な統合の試みー, 第7回日本サイコセラピー学会, 2006年2月4-5日, 東京都.

上別府圭子: 家族の中で感じるストレス(1), 武蔵野市立 0123 吉祥寺「0123 子育て談話室」, 2006年2月16日, 東京都.

上別府圭子: サイコセラピーと家族看護学, 昭和大学精神療法研究会, 2006年2月25日, 東京都.

上別府圭子, 小林京子: 小児がんサバイバーと家族における晩期障害の実態と学際的介入プログラムの開発, 第4回長期フォローアップガイドライン共同研究, 2006年2月26日, 東京都.

上別府圭子: 家族の中で感じるストレス(2), 武蔵野市立 0123 吉祥寺「0123 子育て談話室」, 2006年3月2日, 東京都.

上別府圭子, 小林京子: 小児がんサバイバーと家族における晩期障害の実態と学際的介入プログラムの開発, 第3回小児がん助成ミーティング, 2006年1月15日, 東京都.

上別府圭子: (司会) 宮本真巳 看護とサイコセラピーー私的な統合の試みー, 第7回日本サイコセラピー学会, 2006年2月4-5日, 東京都.

上別府圭子: 家族の中で感じるストレス(1), 武蔵野市立 0123 吉祥寺「0123 子育て談話室」, 2006年2月16日, 東京都.

上別府圭子: サイコセラピーと家族看護学, 昭和大学精神療法研究会, 2006年2月25日, 東京都.

上別府圭子, 小林京子: 小児がんサバイバーと家族における晩期障害の実態と学際的介入プログラムの開発, 第4回小児がん助成ミーティング, 2006年2月26日, 東京都.

上別府圭子: 家族の中で感じるストレス(2), 武蔵野市立 0123 吉祥寺「0123 子育て談話室」, 2006年3月2日, 東京都.

上別府圭子, 掛江直子: 小児がんサバイバーの QOL 尺度開発(15), 平成 18 年度厚生労働省がん研究助成金 岡本班・藤本班・堀部班三班合同班会議, 2006年6月16日, 愛知県名古屋市.

上別府圭子: 臨床心理学研究法特論, 放送大学第1学期放送授業(ラジオ), 放送大学学園, 2006年6月18日.

上別府圭子: 「女性のための健康相談・カウンセリング的演習」, 健やか親子 21 平成 18 年度「女性の健康エクササイズセミナー」, (社)全国保健センター連合会, 2006年8月15日, 東京都.

石田也寸志, 上別府圭子: 小児がん経験者の晩期障害・QOL 調査の提案, 平成 18 年度厚生労働省がん研究所精勤「小児がん克服者の QOL と予後の把握およびその追跡システムの確立に関する研究(研究課題番号 18-14) 第 2 回岡本班会議, 2006年9月1日, 福岡県福岡市.

上別府圭子: 教育研修の方法とその効果について, 産後の母親のメンタルヘルスと育児支援セミナー～育児不安から虐待まで対応できる支援スキルの向上をめざして～, 平成 18 年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業), 2006年9月21-22日, 福岡県福岡市.

吉田敬子, 山下洋, 鈴宮寛子, 上別府圭子: (1)育児不安を訴える母親へのアドバイスと地域での見守りのポイント, (2)産後うつ病の母親への対応: 地域での継続支援か精神科への紹介か, (3)虐待ケースの地域での継続支援と他機関への連携のポイント, 産後の母親のメンタルヘルスと育児支援セミナー～育児不安から虐待まで対応できる支援スキルの向上をめざして～, 平成 18 年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業), 2006年9月21-22日, 福岡県福岡市.

上別府圭子: (司会)「目標喪失の時代にわれわれは青少年をいかに支援できるか」, 第22回日本精神衛生学会大会(メインシンポジウム)「目標喪失の時代を生きる」, 2006年10月27-28日, 千葉県千葉市.

上別府圭子: 小児がんの子どもと家族, 2006年度北里大学大学院医療系研究科特別講義, 2006年11月30日, 神奈川県相模原市.

上別府圭子: 臨床心理学研究法特論, 放送大学第2学期放送授業(ラジオ), 放送大学学園, 2006年

12月13日.

上別府圭子: 臨床心理学研究法特論, 放送大学第2学期冬季集中放送授業(ラジオ), 放送大学学園, 2007年2月9日.

一般雑誌・新聞その他

上別府圭子: 家族看護の現状と課題, さつき 44, p12-15, 2005.

上別府圭子: 書評「みみずくの日々好日」五木寛之著, 心と社会, 36(2), 120, p141, 2005.

上別府圭子: (寄稿)「わが国にも子どものホスピス開設を カナダ・Canuck Place Children's Hospice視察報告」, 週刊医学界新聞, 2650, p4, 2005.

近藤佳代子: 22世紀を見据えた日本の疾病管理戦略とは, ナーシング・トゥデイ, 20(10), 77, 2005.

近藤佳代子: 【夜勤とうまくつき合おう】夜勤と睡眠にまつわるトピックス, ナーシング・トゥデイ, 20(7), 32-33, 2005.

近藤佳代子: 社会学から看護へのアプローチ 医療と社会学の接点から生まれるもの, ナーシング・トゥデイ, 20(2), 68-69, 2005.

岡崎佳織: 書評「あまいろそよそよ 福祉施設からくる声の頼り「あじさいテレフォンメッセージ」秋山哲之介著, 心と社会, 36(4), 122, p93, 2005.

上別府圭子: 書評「キャロル・リヴィングストン 文 / 庄司順一訳『どうして私は養子になったの?』」, 心と社会, 36(1), 111, 2005.

上別府圭子: 『子どもの精神科』山登敬之著, 心と社会, 37(2), 124, 144, 2006.

上別府圭子: 『カウンセリングナース-新たな看護手法を求めて』徳永雄一郎編, 精神療法, 32(4), 510-511, 2006.

上別府圭子: 編集後記, 心と社会, 37(4), 126, 103, 2006.

山崎あけみ: 書評「心的外傷と回復」ジュディス・ルイス・ハーマン著・中井久夫訳「心的外傷と回復」, 家族看護, 4(2), 138, 2006.

上野里絵：精神疾患を有する人の子育てに関する研究(その 1)，首都圏精神科ネット，
<http://www.psyhp.net>，2006 年 6 月。

上野里絵：精神疾患を有する人の子育てに関する研究(その 2)，首都圏精神科ネット，
<http://www.psyhp.net>，2006 年 7 月。

2 - 3. 学内外の公的活動

上別府圭子

- 2000年 - 日本児童青年精神医学会 評議員
- 2002年 - 日本精神衛生学会 常任理事
- 2003年 - 日本精神衛生会 「こころと社会」編集委員
- 2004年 - 日本サイコセラピー学会 常任理事
- 2004年 - 日本児童青年精神医学会 福祉に関する委員会委員(-2007年3月)
- 2006年 第22回日本精神衛生学会 実行委員(-2006年11月)
- 2006年 - 日本予防医学リスクマネジメント学会 理事
- 2006年 第47回日本児童青年精神医学会 プログラム委員(-2006年10月)
- 2006年 第5回日本予防医学リスクマネジメント学会学術総会プログラム委員(-2008年3月)
- 2006年 日本看護科学学会第27回学術集会 企画委員(-2007年12月)

山崎あけみ

- 2006年 日本看護科学学会第27回学術集会 企画委員(-2007年12月)

松井典子

- 2000年 - 日本母性衛生学会 幹事(学術)
- 2003年 - 日本予防医学リスクマネジメント学会評議員

尾関志保

- 2006年 日本看護科学学会第26回学術集会 実行委員
- 2006年 医療安全教育セミナー2006・後期(12月15-16日)
ファシリテーター

家族看護学教室

平成17年度都立大塚病院看護部教育委員会「看護研究」

平成17年5月20日

上別府圭子 「愉快地に看護研究! Shall we research for nursing?」

山崎あけみ 「看護研究」

平成17年6月10日

松井典子 「研究デザインとは」

平成17年11月25日

松井典子 「看護研究のまとめ方」

平成 18 年 2 月 17 日

上別府圭子 研究発表会

平成 17 年度都立大塚病院看護部教育委員会[周産期看護]エキスパートナース研修

平成 17 年 10 月 21 日

山崎あけみ 「家族看護」

平成 18 年度都立大塚病院看護部教育委員会「看護研究」

平成 18 年 5 月 31 日

上別府圭子 「愉快地に看護研究を！」

山崎あけみ 「看護研究」

平成 18 年 6 月 21 日

尾関志保 「研究デザイン」

平成 18 年 9 月 14 日

尾関志保 「看護研究計画書の作成」

平成 18 年 11 月 29 日

尾関志保 「看護研究のまとめ方」

平成 19 年 1 月 19 日

尾関志保 「看護研究のまとめ」

平成 19 年 2 月 19 日

上別府圭子 「研究発表会」

平成 18 年度都立大塚病院看護部教育委員会[周産期看護]エキスパートナース研修

平成 18 年 7 月 26 日

山崎あけみ 「家族看護についてのコンサルテーションの意義とプロセス」

東京都看護協会東部地区支部「看護研究・実践報告会」(コメンテーター)

平成 18 年 1 月 28 日 山崎あけみ

平成 19 年 2 月 3 日 上別府圭子

3. 教室カンファレンス

平成 17 年度

4 月 5 日

平成 17 年度教室方針

平成 17 年度研究計画・目標

4 月 12 日

上野里絵 (修士論文経過報告)

精神疾患を有する女性が「親になること」に関する質的研究-病と子育てのナラティブから-

岡崎佳織 (修士論文経過報告)

医療的ケアを要する児の家族の経験-在宅療養に関する質的研究-

小林京子 (修士論文経過報告)

小児がん経験者の Quality of Life に関する研究

4 月 19 日

上野里絵 (抄読)

Mowbray, C.T., Oyserman, D., Bybee, D., MacFarlane, P., Rueda-Riedle, A.: Life Circumstances of Mothers with Serious Mental Illness, *Psychiatric Rehabilitation Journal*, 25(2), 114-123, 2001.

涌水理恵 (博士論文経過報告)

外科的小手術を受ける幼児への術前教育ビデオによるプリパレーション介入の有効性の検討 -子どものストレス反応に焦点を当てて-

4 月 26 日

岡崎佳織 (抄読)

Scharer, K., Dixon, D.M.: Managing Chronic Illness: Parents with a Ventilator-Dependent Child, *Journal of Pediatric Nursing*, 4(4), 236-247, 1989.

近藤佳代子 (博士論文経過報告)

Development of a disease-specific instrument to measure quality of life in primary caregivers of children with atopic dermatitis

5 月 10 日

小林京子 (抄読)

Vance, Y.H., Morse, R.C., Jenney, M.E., Eiser, C.: Issues in Measuring Quality

of Life in Childhood Cancer: Measures, Proxies, and Parental Mental Health, *Journal of Child Psychological and Psychiatry*, 42(5), 661-667, 2001.

古田正代 (研究発表)

修士論文を終えて 産後1カ月の第1子を養育する母親の抑うつ及び関連要因

5月17日

近藤佳代子 (抄読)

Saeki, H., Iizuka, H., Mori, Y., Akasaka, T., Takagi, H., Kitajima, Y., Tezuka, T., Tanaka, T., Hide, M., Yamamoto, S., Hirose, Y., Kodama, H., Urabe, K., Furue, M., Kasagi, F., Torii, H., Nakamura, K., Morita, E., Tsunemi, Y., Tamaki, K.: Prevalence of atopic dermatitis in Japanese elementary schoolchildren, *British Journal of Dermatology*, 152(1), 110-114, 2005.

小林京子 (修士論文経過報告)

小児がん経験者の Quality of Life に関する研究

5月24日

陳俊霞 (抄読)

Dowdell, E. B.: Grandmother Caregivers and Caregiver Burden, *American Journal of Maternal-Child Nursing*, 29(5), 299-304, 2004.

恩田清美 (研究発表)

ネットワーク分析は看護分野で活用できるか 子どもの在宅療養におけるソーシャルサポートの研究において

6月7日 抄読

長谷川美由紀 (抄読)

DePalma, J. A., Fedorka, P., Simko, L. C.: Quality of Life Experienced by Severely Injured Trauma Survivors, *ACCN Clinical Issues*, 14(1), 54-63, 2003.

上野里絵 (修士論文経過報告)

精神疾患を有する女性が「親になること」に関する質的研究 -病と子育てのナラティブから-

6月14日 抄読

山本弘江 (抄読)

Reece, S. M., Harkless, G.: Self-Efficacy, Stress, and parental Adaptation: Applications to the Care of Childbearing Families, *Journal of Family Nursing*, 4(2), 198-215, 1998.

古田正代 (研究発表)

母親のメンタルヘルスに影響を与える要因 - 児の行動に焦点を当てて -

6月21日

古田正代 (抄読)

Mathiesen, K. S., Tambs, K., Dalgard, O. S.: The influence of social class, strain and social support on symptoms of anxiety and depression in mothers of toddlers, *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 34(2), 61-72, 1999.

岡崎佳織 (修士論文経過報告)

医療的ケアを必要とする児の家族の経験 - 在宅療養移行に関する質的研究 -

6月28日

長谷川美由紀 (抄読)

Lee, L. Y. Y., Lau, L.: Immediate needs of adult family members of adult intensive care patients in Hong Kong, *Journal of Clinical Nursing*, 12(4), 490-500, 2003.

小林京子 (修士論文経過報告)

小児がん経験者の Quality of Life と影響要因の探索

7月5日

近藤佳代子 (研究発表)

Development of an instrument specifically designed to measure quality of life in primary caregivers of children with atopic dermatitis

涌水理恵 (博士論文経過報告)

外科的小手術を受ける幼児への術前教育ビデオによるプリパレーション介入の有効性の検討

7月12日

涌水理恵 (抄読)

Thompson, R. H., Vernon, D. T. A.: Research on Children's Behavior after Hospitalization: A Review and Synthesis, *Developmental and Behavioral Pediatrics*, 14(1), 28-35, 1993.

Vernon, D. T. A., Thompson, R. H.: Research on the Effect of Experimental Interventions on Children's Behavior after Hospitalization: A Review and Synthesis, *Developmental and Behavioral Pediatrics*, 14(1), 36-44, 1993.

長谷川美由紀 (研究発表)

集中治療領域における家族看護について

9月6日

上野里絵（修士論文経過報告）

精神疾患を有する女性が親になること -病と子育てのナラティブから-

岡崎佳織（修士論文経過報告）

医療的ケアを必要とする児の家族の経験 -在宅療養移行に関する質的研究-

小林京子（修士論文経過報告）

小児 QOL 尺度 Pediatric Quality of Life Inventory 4.0 Generic Core Scales (PedsQL)

日本語版の開発 -信頼性・妥当性の検証-

9月13日

近藤佳代子（抄読）

Sullivan, M.: The new subjective medicine: taking the patient's point of view on health care and health, *Social Science and Medicine*, 56(7), 1595-1604, 2003.

涌水理恵（研究発表）

博士論文進捗状況と関連話題

9月20日

涌水理恵（抄読）

Felder-Puig, R., Maksys, A., Noestlinger, C., Gardner, H., Stark, H., Pfluegler, A., Topf, R.: Using a children's book to prepare children and parents for elective ENT surgery: result of a randomized clinical trial, *International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology*, 67(1), 35-41, 2003.

恩田清美（第52回日本小児保健学会・口演発表予演）

子どもの在宅ターミナル期における学校問題

子どもの在宅ターミナル期における家族に必要な情報と相談相手及び協力者

9月27日

小林京子（抄読）

Varni, J.W., Burwinkle, T.M., Katz, E.R.: The PedsQL in Pediatric Cancer Pain: A Prospective Longitudinal Analysis of Pain and Emotional Distress, *Developmental and Behavioral Pediatrics*, 25(4), 239-246, 2004.

上野里絵（修士論文経過報告）

精神疾患を有する女性が親のなること -病と子育てのナラティブから-

10月4日

岡崎佳織（抄読）

Kirk, S., Glendinning, C.: Supporting 'expert' parents - professional support and families caring for a child with complex health care needs in the community, *International Journal of Nursing Studies*, 39(6), 625-635, 2002.

長谷川美由紀 (研究発表)

クリティカル領域における家族看護について

10月11日

池田真理 (抄読)

Bodenheimer, T., Lorig, K., Holman, H., Grumbach K.: Patient Self-management of Chronic Disease in Primary Care, *JAMA*, 288(19), 2469-2475, 2002.

Lorig, K.R., Ritter, P., Stewart, A.L., Sobel, D.S., Brown, B.W. Jr, Bandura, A., Gonzalez, V.M., Laurent, D.D., Holman, H.R.: Chronic Disease Self-Management Program 2-Year Health Status and Health Care Utilization Outcome, *Medical Care*, 39(11), 1217-1223, 2001.

岡崎佳織 (修士論文経過報告)

医療的ケアを必要とする児の家族の経験 -在宅療養移行に関する質的研究-

11月15日

長谷川美由紀 (抄読)

Merlevede, E., Spooren, D., Henderick, H., Portzky, G., Buylaert, W., Jannes, C., Calle, P., Van Staey, M., De Rock, C., Smeesters, L., Michem, N., Van Heeringen, K.: Perceptions, needs and mourning reactions of bereaved relatives confronted with a sudden unexpected death, *Resuscitation*, 61(3), 341-348, 2004.

近藤佳代子 (博士論文経過報告)

博士論文データの分析: アトピー性皮膚炎をめぐる医療不信の構造 -第1報-

11月22日

恩田清美 (抄読)

Yin, L.K., Twinn, S.: The Effect of Childhood Cancer on Hong Kong Chinese Families at Different Stages of the Disease, *Cancer Nursing*, 27(1), 17-24, 2004.

上野里絵 (修士論文経過報告)

精神疾患を有する人の「親になること」に関する研究 -病と子育てについての女性のナラティブからの質的研究-

11月29日

池田真理 (研究発表)

准看護師の職業意識に関する研究

及川裕子（研究発表）

親性の発達に関する研究

12月6日

陳俊霞（抄読）

Butler, F. R., Zakari, N.: Grandparents Parenting Grandchildren Assessing Health Status, Parental Stress, and Social Support, *Journal of Gerontological Nursing*, 31(3), 43-54, 2005.

小林京子（修士論文経過報告）

PedsQL (Pediatric Quality of Life Inventory) Generic Core Scales 4.0 日本語版の開発

12月13日

山本弘江（抄読）

Holloway, S. D., Behrens, K. Y.: Parenting Self-Efficacy Among Japanese Mothers: Qualitative and Quantitative Perspectives on Its Association with Childhood Memories of Family Relations, *New Directions for Child and Adolescent Development*, 96, 27-43, 2002.

岡崎佳織（修士論文経過報告）

在宅で子どもの医療的ケアを行う母親の経験に関する質的研究、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ -分析方法の実際-

1月10日

顔合わせ

1月17日

上野里絵（修士論文発表予定）

精神疾患を有する人の「親になること」に関する研究 -病と子育てについての女性のナラティブからの質的分析-

岡崎佳織（修士論文発表予定）

在宅で子どもの医療的ケアを行う母親の経験に関する質的研究

小林京子（修士論文発表予定）

PedsQL (Pediatric Quality of Life Inventory 4.0) 日本語版の開発

1月24日

上野里絵（修士論文発表予演）

精神疾患を有する人の「親になること」に関する研究 -病と子育てについての女性の
ナラティブからの質的分析-

岡崎佳織（修士論文発表予演）

在宅で子どもの医療的ケアを行う母親の経験に関する質的研究

小林京子（修士論文発表予演）

PedsQL (Pediatric Quality of Life Inventory 4.0) 日本語版の開発

1月31日

池田真理（予演）

准看護師の看護資格取得の意志と関連要因の研究

2月7日

上野里絵（抄読）

Nicholson, J., Nason, M. W., Calabresi, A. O., Yando, R.: Fathers with severe mental
illness: Characteristics and comparisons, *American Journal of Orthopsychiatry*,
69(1), 134-141, 1995.

長谷川美由紀（研究発表）

クリティカル領域で家族を亡くした遺族の心的外傷ストレス症状（PTSS）の実態と関
連要因について

2月21日

小林京子（抄読）

Sneeuw, K. C., Aaronson, N. K., Sprangers, M. A., Detmar, S. B., Wever, L. D.,
Schornagel, J. H.: Comparison of patient and proxy EORTC QLQ-C30 ratings in
assessing the Quality of Life of cancer patients, *Journal of Clinical Epidemiology*,
51(7), 617-631, 1998.

陳俊霞（研究発表）

祖父母の育児参加は祖父母の主観的幸福感に与える影響

2月28日

近藤佳代子（博士論文経過報告）

Development and validation of an instrument measuring quality of life in
caregivers of children with atopic dermatitis.

涌水理恵（博士論文経過報告）

博士論文進捗状況と関連話題

3月7日

長谷川美由紀（抄読）

Jones, C., Griffiths, R.D., Humphris, G., Skirrow, P.M.: Memory, delusions, and the development of acute posttraumatic stress disorder-related symptoms after intensive care, *Critical Care Medicine*, 29(3), 573-580, 2001.

野中淳子（研究発表）

小児癌の子どものきょうだいの支援に関する研究 -親・医療者のきょうだいに対する
かかわりと配慮、きょうだいの思い-

3月14日

平成17年度の活動報告

平成18年度

4月4日

平成18年度教室方針

平成18年度研究計画・目標

4月11日

上野里絵（抄読）

Nostlinger, C., Jonckheer, T., de Belder, E., van Wijngaerden, E., Wylock, C., Pelgrom, J., Colebunders, R.: Families affected by HIV: parents' and children's characteristics and disclosure to the children, *Aids Care*, 16(5), 641-648, 2004.

長谷川美由紀（修士論文経過報告）

クリティカル領域の看護師が経験した外傷性ストレスの実態と関連要因について

4月18日

岡崎佳織（抄読）

Pedersen, S.D., Parsons, H.G., Dewey, D.: Stress levels experienced by the parents of enterally fed children, *Child: Care, Health & Development*, 30(5), 507-513, 2004.

長谷川美由紀（修士論文経過報告）

看護師の外傷性ストレスに対する実態と関連要因について

4月25日

池田真理（抄読）

Barlow, J.H., Turner, A.P., Wright, C.C.: A randomized controlled study of the

Arthritis Self-Management Programme in the UK, *Health Education Research*, 15(6), 665-680, 2000.

陳俊霞 (研究発表)

祖父母の育児参加が主観幸福感に与える影響

5月9日

涌水理恵 (抄読)

Barlow, J., Parsons, J., Stewart-Brown, S.: Preventing emotional and behavioural problems: the effectiveness of parenting programmes with children less than 3 years of age, *Child: Care, Health & Development*, 31 (1), 33-42, 2005.

長谷川美由紀 (修士論文経過報告)

看護師の職務上の精神的ストレスと関連要因 ～外傷性ストレスの観点から～

5月16日

佐藤伊織 (抄読)

Kendra D. MacLeod, Stan F. Whitsett, Eric J. Mash, and Wendy Pelletier. : Pediatric Sibling Donors of Successful and Unsuccessful Hematopoietic Stem Cell Transplants (HSCT): A Qualitative Study of Their Psychosocial Experience, *Journal of Pediatric Psychology*, 28(4), 223-231, 2003.

涌水理恵 (博士論文経過報告)

博士論文進捗状況と関連話題

5月23日

長谷川美由紀 (抄読)

Jonsson, A., Segesten, K.: Daily Stress and Concept of Self in Swedish Ambulance Personnel, *Prehospital and Disaster Medicine*, 19(3), 226-234, 2004.

上野里絵 (研究発表)

精神疾患を有する人の「親になること」に関する研究 —病いと子育てについての女性のナラティブからの質的分析—

5月30日

藤岡寛 (抄読)

Shin, H., White-Traut, R.: Nurse-child interaction on an inpatient pediatric unit, *Journal of Advanced Nursing*, 52(1), 56-62, 2005.

岡崎佳織 (研究発表)

在宅で子どもの医療的ケアを行う母親の経験に関する質的研究

6月6日

小西美樹 (抄読)

Penticuff, J.H., Arheart, K.L.: Effectiveness of an Intervention to Improve Parent-Professional Collaboration in Neonatal Intensive Care, *Journal of Perinatal & Neonatal Nursing*, 19(2), 187-202, 2005.

陳俊霞 (研究発表)

祖父母の育児参加に関する研究

6月13日

陳俊霞 (抄読)

Pruchno, R.A., McKenney, D.: Psychological Well-Being of Black and White Grandmothers Raising Grandchildren: Examination of a Two-Factor Model, *The journals of gerontology. Series B, Psychological sciences and social sciences*, 57 (5), 444-452, 2002.

藤岡寛 (研究発表)

臨床における看護師と子どものコミュニケーションの分析 -子どもの認知・感情・行動について-

6月20日

長谷川美由紀 (抄読)

O'Connor, J., Jeavons, S.: Nurses perception of critical incidents, *Journal of Advanced Nursing*, 41(1), 53-62, 2003.

小西美樹 (研究発表)

NICUにおける母親によるミルク注入に関する研究

6月27日

藤岡寛 (抄読)

Mahat, G., Scoloveno, M.A., Cannella, B.: Comparison of Children's Fears of Medical Experiences Across Two Cultures, *Journal of Pediatric Health Care*, 18(6), 302-307, 2004.

涌水理恵 (博士論文経過報告)

博士論文進捗状況

7月4日 抄読

近藤佳代子 (抄読)

Charmaz, K.: Experiencing Chronic Illness, In Hand book of social studies in health

and medicine, edited by Gary L. Albrecht: Sage, 277-292, 2003.

近藤佳代子 (博士論文経過報告)

Development and validation of an instrument measuring quality of life in caregivers of children with atopic dermatitis

7月11日

小西美樹 (抄読)

Lawhon, G.: Facilitation of Parenting the Premature Infant with the Newborn Intensive Care Unit, *Journal of Perinatal & Neonatal Nursing*, 16(1), 71-82, 2002.

池田真理 (話題提供)

自己効力感とセルフマネジメント

9月5日 抄読

近藤佳代子 (抄読)

McKenna, S.P., Whalley, D., Dewar, A.L., Erdman, R.A., Kohlmann, T., Niero, M., Baro, E., Cook, S.A., Crickx, B., Frech, F., van Assche, D.: International development of the Parents' Index of Quality of Life in Atopic Dermatitis (PIQoL-AD), *Quality Life Research*, 14(1), 231-241, 2005.

古田正代 (研究発表)

産後のメンタルヘルスとソーシャルサポート

9月19日

涌水理恵 (抄読)

Bar-Maor, J.A., Tadmor, C.S., Birkhan, J., Shoshany, G.: Effective psychological and/or "pharmacological" preparation for elective pediatric surgery can reduce stress, *Pediatric Surgery International*, 4(4), 273-276, 1989.

藤岡寛 (研究発表)

研究計画発表

9月26日

陳俊霞 (研究発表)

祖父母の育児参加に関する研究

10月3日

池田真理 (抄読)

Varni, J.W., Sherman, S.A., Burwinkle, T.M., Dickinson, P.E., Dixon, P.: The

PedsQL Family Impact Module: Preliminary reliability and validity, *Health and Quality of Life Outcomes*, 2, 55, 2004.

小西美樹 (研究発表)

極低出生体重児の母子相互作用を促進するミルク注入場面についてのガイドラインの作成

10月10日

上野里絵 (抄読)

Montgomery, P., Tompkins, C., Forchuk, C., French, S.: Keeping close: mothering with serious mental illness, *Journal of Advanced Nursing*, 54(1), 20-28, 2006.

長谷川美由紀 (修士論文経過報告)

看護師の二次的外傷性ストレスと関連要因に関する研究

11月14日

西垣佳織 (抄読)

Immelt, S.: Psychological Adjustment in Young Children with Chronic Medical Conditions, *Journal of Pediatric Nursing*, 21(5), 362-377, 2006.

涌水理恵 (博士論文経過報告)

博士論文要旨

11月21日

藤岡寛 (抄読)

van Dulmen, S.: Pediatrician-parent-child communication: problem-related or not?, *Patient Education and Counseling*, 52(1), 61-68, 2004.

長谷川美由紀 (修士論文経過報告)

看護師の二次的外傷性ストレスと関連要因に関する研究

11月28日

小西美樹 (抄読)

Muller, M. E.: A Questionnaire to Measure Mother-to-Infant Attachment, *Journal of Nursing Measurement*, 2(2), 129-141, 1994.

近藤佳代子 (博士論文経過報告)

Development and validation of a questionnaire measuring quality of life in primary caregivers of children with atopic dermatitis (QPCAD)

12月5日

古田正代 (抄読)

Weiss, M.E., Ryan, P., Lokken, L.: Validity and Reliability of the Perceived Readiness for Discharge After Birth Scale, *Journal of Obstetric, Gynecologic, and Neonatal Nursing*, 35(1), 34-45, 2006.

古田正代 (抄読)

Myhr, G., Sookman, D., Pinard, G.: Attachment security and parental bonding in adults with obsessive-compulsive disorder: a comparison with depressed out-patients and healthy controls, *Acta psychiatrica Scandinavica*, 109(6), 447-456, 2004.

陳俊霞 (研究発表)

祖父母の育児参加に関する研究

12月12日 研究発表

涌水理恵 (博士論文審査予演)

The Effects of At-Home Preparation Program for Surgery and Hospitalization on Adjustment and Anxiety for Japanese Preschool Children and Caregivers: A Randomized Controlled Trial (入院・手術のための家庭での心理的準備プログラムが日本の就学前の子どもと保護者の適応と不安に及ぼす効果:ランダム化比較試験による検討)

長谷川美由紀 (修士論文経過報告)

看護師の二次的外傷性ストレスと関連要因に関する研究

12月19日

佐藤伊織 (抄読)

Patistea, E., Babatsikou, F.: Parents' perceptions of the information provided to them about their child's leukaemia, *European Journal of Oncology Nursing*, 7(3), 172-181, 2003.

上野里絵 (研究発表)

精神疾患を有する親の子どもの体験に関する研究

1月9日

村上慶子 (卒業論文経過報告)

保育園における保健活動と看護職の役割

相場繁 (卒業論文経過報告)

卒業論文進捗状況

1月16日

村上慶子（卒業論文経過報告）
保育園における保健活動と看護職の役割
相場繁（卒業論文経過報告）
卒業論文進捗状況

1月23日

長谷川美由紀（修士論文発表予定）
看護師の二次的外傷性ストレスと関連要因に関する研究
村上慶子（卒業論文経過報告）
保育園における保健活動と看護職の役割

1月30日 研究発表

長谷川美由紀（修士論文発表予定）
看護師の二次的外傷性ストレスと関連要因に関する研究
相場繁（卒業論文発表予定）
両親によるサポートが高校生の抑うつに与える影響

2月6日

村上慶子（卒業論文発表予定）
保育園における保健活動と看護職の役割
相場繁（卒業論文発表予定）
両親によるサポートが高校生の抑うつに与える影響

2月20日

陳俊霞（抄読）
Reitzes, D.C., Mutran, E.J.: Grandparenthood: Factors Influencing Frequency of Grandparent-Grandchildren Contact and Grandparent Role Satisfaction, *The Journals of Gerontology. Series B, Psychological Sciences and Social Sciences*, 59(1), 9-16, 2004.
西垣佳織（研究発表）
在宅療養障害児の主介護者のレスパイトケア利用に関する研究

3月6日

小西美樹（研究発表）
NICU 入院早期の保育器に収容されている早産児の授乳場面に母親が参加するための看

護支援の開発

藤岡寛 (研究発表)

思春期の子どもの服薬に対する認知と感情の変遷(プロセス)についての質的研究

長谷川美由紀 (第6回日本トラウマティック・ストレス学会・ポスター発表予演)

看護師の二次的外傷性ストレスと関連要因

3月13日

小西美樹 (抄読)

Jackson, K., Ternestedt, B.M., Schollin, J.: From alienation to familiarity: experiences of mothers and fathers of preterm infants, *Journal of Advanced Nursing*, 43(2), 120-129, 2003.

藤岡寛 (抄読)

Tebbi, C.K.: Treatment Compliance in Childhood and Adolescence, *Cancer*, 71(10), 3441-3449, 1993.

4. 家族看護学教室研究会

4-1. 家族看護学研究会

第25回 2005年4月22日

野中淳子(神奈川県立保健福祉大学看護学科助教授/当教室客員研究員)

「小児がんの子どもと家族のサポート」

第26回 2005年6月24日

及川裕子(埼玉県立大学短大部専攻科助産学専攻講師/当教室研究生)

「親性の発達に関する研究－乳幼児期の子どもの親に焦点をあてて－」

第27回 2005年9月30日

尾関志保(日赤医療センター小児病棟看護師/当教室客員研究員)

「小児がんの子どもと家族の、症状に対する対処行動に関する研究について」

第28回 2005年12月2日

松本和史(東京大学医科学研究所付属病院看護師/当教室客員研究員)

「探索型臨床研究におけるトランスレーショナルリサーチ・コーディネーターの役割」

第29回 2006年2月17日

渡邊久美(岡山大学医学部保健学科助手/当教室客員研究員)

「看護師の家族へのかかわりを阻害する要因－がん・高齢者看護領域での面接調査による比較検討から－」

第30回 2006年4月21日

大嶺ふじ子(琉球大学医学部保健学科母性看護・助産学講師)

「母性看護学の地域実践としての大学生と教員による思春期健康教育の実践およびその効果の検討」

第31回 2006年6月16日

栗原佳代子(淑徳大学・日本歯科大学非常勤講師、当教室研究生)

「自然気胸患者における周術期の不安」

第32回 2006年9月22日

戈木クレイグヒル滋子(首都大学東京健康福祉学部教授)

「グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ」

第33回 2006年11月17日

大島巖(日本社会事業大学教授)

「精神保健福祉領域におけるプログラム評価の現状と課題」

第34回 2006年2月16日

涌水 理恵(当教室大学院博士課程)

「外科的小手術を受ける就学前幼児を対象とした家庭で行うプレパレーションプログラムの効果：ランダム化比較試験による検討」

4 - 2.

8 2005 5 20

1 0

9 2005 10 28

—

10 2005 12 16

—NICU

11 2006 3 17

— IVH —

12 18 5 26

1

—

13 18 10 20

1

—

14 18 12 15

15 19 3 16

1

— NICU —

5. 家族ケアフォーラム

第3回 平成17年7月15日(金) 13:30~16:20

テーマ: End of Life Care から Grief Care へ

講演者: 中川恵一 (東京大学大学院医学系研究科放射線医学講座放射線治療学助教授/東京大学医学部附属病院緩和ケア診療部長(兼任))
安田恵美 (東京大学医学部附属病院 緩和ケアチーム専従看護師)
朝倉隆司 (東京学芸大学教育学部養護教育講座 教授)
河正子 (東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻
成人看護学・ターミナルケア看護学分野 講師)
上別府圭子 (東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻
家族看護学分野 助教授)

「End of Life Care から Grief Care へ」をテーマに、第1回、第2回と同様、多職種のシンポジスト、指定討論者を迎えてシンポジウムを開催。医師、看護師、グループワーカーの視点からの講演、指定討論に続き、難治性の病をもつ患者と家族の支援について意見交換や提案が行われた。看護師、保健師、臨床心理士、保育士、大学教員、学生など、48名が参加。

第4回 平成18年7月14日(金) 13:30~16:30

テーマ: 子どもの虐待とその周辺

講演者: 川口香織 (心身障害児総合医療療育センター整肢療護園2病棟 看護係長)
山崎知克 (独立行政法人国立病院機構天竜病院精神科 医師/東京慈恵会
医科大学小児科学講座 助手)
齊藤春恵 (横浜市中福祉保健センター 保健師)
庄司順一 (青山学院大学文学部 教授)
上別府圭子 (東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻
家族看護学分野 助教授)

「子どもの虐待とその周辺」をテーマに、これまでと同様、多職種のシンポジスト、指定討論者を迎えてシンポジウムを開催。医師、看護師、保健師、臨床心理士の視点からの講演、指定討論に続き、子どもの虐待とその周辺の支援について意見交換や提案が行われた。看護師、保健師、臨床心理士、保育士、大学教員、学生など、37名が参加。

6. 「質的研究-修正版 GT 法」勉強会

【目的】

*GT 法および M-GTA を critical に検討する

【テキスト】

- (1) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生—，弘文堂，1999.
- (2) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—，弘文堂，2003.
- (3) 戈木クレイグヒル滋子：グラウンデッド・セオリー・アプローチ 理論を生み出すまで，新曜社，2006.

【日程】

5月24日

オリエンテーション（参加者顔合わせ、分担決めなど）

5月31日

上野里絵

テキスト(1)第一章「グラウンデッド・セオリーの変遷」

6月7日

西垣佳織

テキスト(1)第二章「理論としてのグラウンデッド・セオリー 第一節～七節」

6月14日

小西美樹

テキスト(1)第三章「グラウンデッド・セオリー・アプローチの方法論的特性」

6月28日

涌水理恵

テキスト(1)第四章「グラウンデッド・セオリー・アプローチの具体的技法 第一節～四節」

7月5日

尾関志保

テキスト(1)第四章「グラウンデッド・セオリー・アプローチの具体的技法 第五節～八節」

9月6日

栗原佳代子

テキスト(2)第一部「質的研究法とグラウンデッド・セオリー・アプローチ 第一章～第六章」

9月13日

藤岡寛

テキスト(2)第二部「修正版 M-GTA のステップ別分析技法 第七章～十章」

9月20日

池田真理

テキスト(2)第二部「修正版 M-GTA のステップ別分析技法 第十一章～十四章」

9月27日

上野里絵

テキスト(2)第二部「修正版 M-GTA のステップ別分析技法 第十五章～十七章」

10月4日

西垣佳織

テキスト(2)第二部「修正版 M-GTA のステップ別分析技法 第十八章～二十章」

10月11日

藤岡寛 (M-GTA 論文抄読)

佐川佳南枝：分裂病患者の薬に対する主体性獲得に関する研究—グラウンデッド・セオリーを用いた分析—, 作業療法, 20 (4), 344-351, 2001.

小西美樹 (M-GTA 論文抄読)

宮坂友美：がん治療後主に検査目的で外来通院している自覚症状のない患者の経験と
思い, 看護研究, 38 (5), 369-381, 2005.

10月18日

栗原佳代子 (GT 論文抄読)

戈木クレイグヒル滋子：最後の場を整える：看護技術としての子どもの死の時期の予
測, 日本看護科学会誌, 21 (3), 50-60, 2001.

尾関志保 (GT 論文抄読)

Magnusson, A., Severinsson, E., Lutzen, K.: Reconstructing mental health
nursing in home care, Journal of Advanced Nursing, 43(4), 351-359, 2003.

11月8日

尾関志保

テキスト(3)「2. グラウンデッド・セオリー・アプローチの分析の流れ」

上野里絵

テキスト(3)「3. リッチなデータの捕獲」

11月15日

栗原佳代子

テキスト(3)「4. 見えない概念を把握するための技法」

11月22日

小西美樹

テキスト(3)「6. 理論を生み出すまで」

池田真理

テキスト(3)「7. さいごの詰め」

11月29日

藤岡寛

テキスト(3)「5. データとの距離のとり方」

まとめ

7. 教室の沿革

2005. 4. 1 尾関志保助手が退職し、(社)日本赤十字社医療センターに転出する。常勤スタッフは助教授 1 (上別府圭子), 講師 1 (山崎あけみ), 助手 1 (松井典子), 技術官 1 (秋山照男) の計 4 名。非常勤講師 5 (鳥居央子先生, 法橋尚宏先生, 清水敬生先生, 星順隆先生, 岩田力先生), 大学院博士課程 3 (近藤佳代子, 涌水理恵, 古田正代 (休学)), 修士課程 5 (上野里絵, 岡崎佳織, 小林京子, 長谷川美由紀, 佐藤伊織 (休学)), 客員研究員 10 (大谷尚子, 内藤直子, 大嶺ふじ子, 北野 (下平) 和代, 渡邊久美, 河田みどり, 池田智子, 松本和史, 尾関志保, 細坂泰子), 研究生 4 (及川裕子, 恩田清美, 野中淳子, 山本弘江), 外国人研究生 1 (陳俊霞)。
2005. 5. 26 平成 17 年度家族看護学教室スタッフ会議を開催。
2005. 7. 15 第 3 回家族ケアフォーラムを開催。テーマ「End of Life Care から Grief Care へ」
2006. 4. 1 尾関志保氏 (前日本赤十字社医療センター看護師) が助手として発令される。常勤スタッフは助教授 1 (上別府圭子), 講師 1 (山崎あけみ), 助手 2 (松井典子, 尾関志保), 技術官 1 (秋山照男) の計 5 名, 非常勤講師 5 (鳥居央子先生, 法橋尚宏先生, 清水敬生先生, 星順隆先生, 岩田力先生), 大学院博士課程 7 (涌水理恵, 近藤佳代子, 古田正代, 池田真理, 上野里絵, 岡崎佳織, 小林京子 (休学)), 修士課程 5 (長谷川美由紀, 陳俊霞, 佐藤伊織, 小西美樹, 藤岡寛), 客員研究員 8 (大谷尚子, 内藤直子, 大嶺ふじ子, 北野 (下平) 和代, 渡邊久美, 池田智子, 松本和史, 細坂泰子), 研究生 3 (恩田清美, 野中淳子, 栗原佳代子), 卒論生 3 (相場繁, 中村奈央, 村上慶子)。
2006. 5. 19 平成 18 年度家族看護学教室スタッフ会議を開催。
2006. 7. 14 第 4 回家族ケアフォーラムを開催。テーマ「子どもの虐待とその周辺」。
2007. 3. 31 松井典子助手が退職し、東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻老年看護学/創傷看護学分野に転出する。

8. 追悼文

杉下先生 ゆっくりお休み下さい

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 准教授 上別府圭子

各方面から寄せられた花々が、祭壇から溢れて境内を飾り、暖かな陽光に一気に花開いた桜の花びらが舞う中で、先生のご葬儀は盛大に執り行われました。先生は、生前、人がにぎやかに集うことを好まれたので、さぞお喜びであろうと思われました。ただ一つ、変わったことは、人々の輪の中から、あのはりのある先生の声かもはや響いてくることはないということだけでした。

先生は、東京大学をこよなく愛し、また誇りをもっていらっしやいました。群馬県太田女子高等学校をご卒業後、1962年に東京大学衛生看護学科に入学されて以来、ロンドン大学聖トマス病院に留学されていた1年半を除き、40余年間の長きを、東京大学と共に歩まれました。先生の生涯は、東京大学にあったと言っても過言ではないと思います。「大丈夫ですよ、東京大学の卒業生ですもの」と、先生が私たちに励ましてくださったあの言葉は、思い返せば、先生が困難に立ち向かわれる際に、ご自分にかけていらした言葉ではなかったかと思えます。

どんなときにも前だけを見て、進み続けようとされる方でした。自信があり、けしてあきらめず、大きな展望をもってことにあたる方でした。先生のそばにいる者さえ、何か大きな夢をかなえることができるような気にさせられました。その魅力で、多くの学生が、先生の周りに集いました。

1999年、初めて病魔に襲われたときにも、とにかく前向きでした。そして七年余にわたる病魔との闘い…、どんなにかはがゆい思いをされたことでしょうか。しかし、この間にも、学科長を務められ、病床にあって「ビリーフ」を訳され、昨秋の日本家族看護学会では、カルガリー大学ライト博士の講演に際し座長を務められました。今年の1月にも、インфекション・コントロール・ドクターの新しい資格を取得されました。

先生、お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。

どうぞ、ゆっくりとお休み下さい。

9. 資料（卒論・修論・博論要旨）

精神疾患を有する人の「親になること」に関する研究
－病いと子育てについての女性のナラティブからの質的分析－
“Becoming a Parent” of persons with mental disorders:
A qualitative analysis on illness and parenting in women’s narratives

36007 上野里絵

Rie Ueno

指導教員：上別府圭子 助教授

Tutor: A. Prof. K. Kamibepu

健康科学・看護学専攻平成 15 年 4 月入学

Admission to Division of Health Sciences
and Nursing in April, 2003

精神疾患を有する人の病いと子育てに関する体験から「親になること」のプロセスを明らかにすることを目的として、20 人の精神疾患を有する女性に対してナラティブ・インタビューを行い、得られた語りをもとに質的に分析を行った。精神疾患を有する女性の「親になること」は、〈「病い」の自分に子育てが阻まれる体験〉から〈子育ては「病い」と対話しながら〉へ向うという、病いを有しながら子育てを可能にしていくプロセスであると同時に、母親としての自信が育まれていくプロセスであることが見出された。〈「病い」を突きつけられる体験〉は、女性が「親になること」を妨げる体験であった。一方で、〈子どもへの無条件な愛情〉、〈「病い」の自分の認識〉、〈生かされながら生きている〉、〈子どもに「病い」の自分を見守られている〉は、女性が「親になること」を促進する体験であった。

精神疾患を有する女性が、「親になること」を妨げる体験の中で、自身の病いがわが子に与えた影響の大きさと深さをまざまざと見せつけられるという、母親にとってこの上ない責め苦を負っていたことが示されたことは、本研究での新たな知見だと考えられる。他方、「親になること」を促進するプロセスの中で、自身の病いをわが子が知り、なおもわが子から受け入れられていると女性が感じていたことは、母親としての自信を高め、病いをもっていても子どもの母親であっていいという保証となり、精神疾患を有しながら子育てをしていくことへの大きな支えとなっていたことも見出された。以上より、ケア提供者は、精神疾患を有する女性は病いに子育てが阻まれ、苦しんでいることを正確に理解し、子どもも視野に入れた包括的な支援を行い、母親としての自信が育まれるような援助をする必要があることが示唆された。

Keywords: becoming a parent, mental disorders, narratives, parenting, qualitative study

在宅で子どもの医療的ケアを行う母親の経験に関する質的研究

Qualitative study on the experience of mothers
who care technology-dependent children at home

46011 岡崎 佳織

Kaori Okazaki

指導教員：上別府圭子 助教授

Tutor: A. prof. K. Kamibeppu

健康科学・看護学専攻平成16年4月入学

Admission to School of Health Sciences

and Nursing in April, 2004

本研究の目的は、在宅で児の医療的ケアを行う母親の精神面の変化のプロセスを質的に明らかにすることである。医療的ケアの原因となる障害や疾患が生じてから現在までの経験について、14名の母親に半構造化インタビューを実施し、修正版グラウンデッド・セオリーの手法を用いて分析した。その結果、在宅療養を行う中で母親の<<精神的余裕>>が増していき、<その子なりの自立を考える>までのプロセスが明らかになった。<医療的ケアの技術を学ぶ>及び<医療的ケアがある児を認める>段階に到達するプロセスで、母親には精神的余裕が生じていた。その後、進学等のきっかけで[社会との接点を考える]ようになっていた。成長に応じてきっかけは何度もあり、その都度母親が望む社会との接点と社会制度の折り合いをつけるために[社会の壁に働きかける]、[社会の壁との調整をする]行動を繰り返していた。この段階で、児が社会との接点をもつ姿を見ることが母親の喜びとなり、精神的余裕を増して[将来に関する視野が広がる]状態に到達し、<児の状況に応じて社会に目を向ける>ようになっていた。一方で、児の医療的ケアや障害の状態に合っていない社会との接点を母親が望むと、精神的余裕が減少する場合もあった。児の年齢が学童後期以上になり身体的状態が落ち着いていると、児の成長発達や医療的ケアの状態に応じて<その子なりの自立を考える>ようになっていた。自立を考えることが児と母親の心理的距離を変化させ、さらに精神的余裕が増していた。以上のように、母親が<その子なりの自立を考える>ようになるまでのプロセスの進行と精神的余裕が増すことは相互に関連して、母親の精神面を変化させていた。

Key Words : technology - dependent children, mothers, home care,
qualitative study

PedsQL (Pediatric Quality of Life Inventory 4.0)日本語版の開発
Development of Japanese Version of PedsQL (Pediatric Quality of Life
Inventory 4.0)

46016 小林京子

Kyoko Kobayashi

指導教員：上別府圭子 助教授

Tutor : A. Prof. K. Kamibeppu

健康科学・看護学専攻平成16年4入学

Admission to Division of Health Sciences

and Nursing in April, 2004

自己評価と代理評価を備えた子どものための健康関連 QOL 尺度の PedsQL (Pediatric Quality of Life Inventory 4.0)の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性の検証を行った。対象は、5-18歳の小児940名、2-18歳の小児の親1011名であった。PedsQLの2-4歳、5歳、6-7歳、8-12歳、13-18歳の5書式の自己評価尺度と代理評価尺度の、実行可能性、内的整合性、再現性、因子妥当性、弁別的妥当性、収束的妥当性、うつ尺度との基準関連妥当性と、健康状態(定期的な受診の有無、抑うつの有無)の異なる2群での臨床的妥当性について検証した。その結果、8-12歳、13-18歳児用の自己評価尺度と全ての代理評価尺度で、高い内的整合性(α 係数)が示され、信頼性が確認された。妥当性は、8-12歳、13-18歳児用の自己評価尺度代理評価で尺度の成功率は70%以上となり、抑うつ尺度との相関が明らかで妥当性が示された。5歳、6-7歳児用の自己評価尺度は信頼性、妥当性が低く、子どもの年齢によって信頼性と妥当性が大きく異なることが明らかになった。また、自己評価と代理評価の相関は $r=0.19\sim 0.42$ の範囲だった。自己-代理評価の関連の強い下位尺度は、小児の最も関心のある健康問題と考えられ、それに対する親の評価の有用性が示唆された。

Key words : PedsQL , Quality of Life, 尺度, 小児, 信頼性, 代理評価, 妥当性

卒業論文内容要旨

論文題目：両親によるサポートが高校生の抑うつに与える影響

指導教員：上別府 圭子 助教授

東京大学医学部健康科学・看護学科

平成 17 年度進学

氏名 相場 繁

【緒言】

成人および子どもの抑うつが増加に伴い、抑うつに関連要因についての研究がなされている。そして、ストレスが抑うつを引き起こすこと、関連要因のうち個人の特性として属性、性格傾向、増強要因としてストレス量、緩衝要因としてソーシャルサポートが挙げられている、また、ソーシャルサポートの緩衝作用は、サポートの提供者によってその大きさが異なるとされている。高校生にとってソーシャルサポートは両親によるものと、両親以外の者によるものに分けられると考えられるが、両親によるサポートの影響について述べた研究は少なく、父親サポート、母親サポートに分けて実態を明らかにした研究は見られていない。

【目的】

高校生の抑うつの実態、および高校生に対するソーシャルサポートを父親によるもの、母親によるものに分けて実態を調査し、抑うつに対する、個人の特性、増強要因、緩衝要因の影響を探索することを目的とした。

【方法】

首都圏近郊の私立 A 高等学校に在籍する 1 年生から 3 年生の生徒を対象に、無記名自記式質問紙調査を行った。抑うつは The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale 日本語版 (CES-D) を用いて尋ね、個人の特性として属性(性別、学年)、性格傾向 (NEO-FFI)、増強要因としてストレス量 (思春期用日常生活ストレス尺度)、緩衝要因として同居家族の有無、ソーシャルサポート (学生用ソーシャルサポート尺度) を尋ねた。[図 1]

有効回答数 168 名 (25.0%) を得た。

【結果】

全生徒の CES-D 得点は 20.78 ± 11.58 (男子生徒 19.14 ± 9.31 、女子生徒 21.28 ± 12.24) であり抑うつ群の割合は 61.3% (男子生徒 62.8%、女子生徒 61.5%) であった。

サポート得点について、男女双方とも、父親、母親によるサポートより、両親以外の者によるサポート (以下、その他サポート) を受け取っていることが示された。また母親サポート、その他サポート得点において性別間に有意差が認められ、女子生徒のほうが多くサポートを受けとっていると

感じていることが認められた。

抑うつに関連要因としてN得点($\beta=0.429$, $p<0.01$)、ストレス得点($\beta=0.245$, $p<0.01$)、母親サポート得点($\beta=0.240$, $p<0.01$)が認められた。[表1]

【考察】

抑うつの実態に関して、回収率が低いためA校の生徒全体に当てはまるかどうかは不明であるが、先行研究と比べてCES-D得点の平均値、抑うつ群の割合が高く、高校生の中で抑うつの状態が広がっていることが示唆された。

サポートの実態に関して、その他サポートを多く受けとっていることから、両親以外の他者との関係性が広がっていることが考えられた。また、性別によって受けとっていると感じているサポート量が異なることから、高校生のソーシャルサポートに関しては、今後、詳細な研究が必要である。

抑うつの関連要因に関して新たに明らかになったことは、ソーシャルサポートの中でも母親サポートが重要であり、客観的に母親がいるかないかよりも、主観的にサポートを受けていると感じているかが抑うつと関連する、ということであった。高校生年代では、中学生年代以前と同様に、母親サポートの重要性は共通するものの、必要なサポートの内容は異なる可能性があり、この点について更なる研究が必要である。

【結論】

本研究は対象校が1校であり、回答率が低かったために知見の一般化には限界があるものの、高校生においても母親のサポートに着目する必要があるとする新たな知見をもたらした。このことから学校精神保健分野においては、生徒の抑うつ予防のためには生徒自身の性格やストレス状況に注意するだけでなく家族との関係性にも着目し、学校と家族の連携について考えていく必要があると思われた。

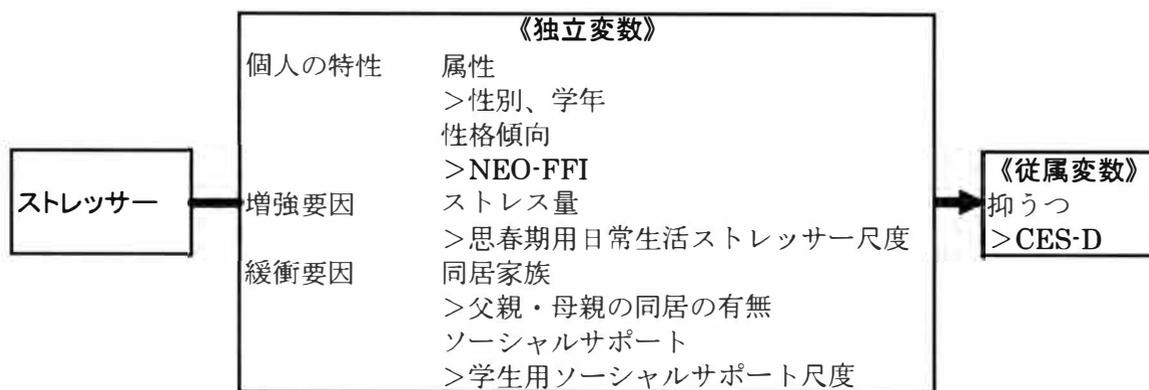


図1 本研究の概念図

表1 CES-Dを従属変数とした重回帰分析

		β	t	VIF
個人の特徴	神経質傾向得点	0.429	5.646**	1.230
増強要因	ストレス得点	0.245	3.099**	1.343
緩衝要因	母親サポート得点	0.240	3.156**	1.241

AdjustedR²=0.486 F=35.70**

** : $p<0.01$

各独立変数を変数減少法によって減少させた(基準F確率 ≥ 0.20)

卒業論文要旨

論文題目：保育園における保健活動と看護職の役割

指導教員：上別府圭子助教授

東京大学医学部健康科学・看護学科

平成 17 年度進学

氏名 村上慶子

緒言

女性の社会進出に伴い、保育園は重要さを増している。そのため、通常保育に加えて様々な形態が生じており、これに対応した乳幼児の健康管理のあり方が問われ、専門性をもつ看護職に期待される役割も増大している。実際、保育園の管理者・保護者からの看護職に対する評価は高いことが報告されている。しかし、全国の保育園 22,494 園に対し、看護職は 4,365 人のみである（平成 16 年現在）。厚生省（当時）児童家庭局による「対象乳児 9 人以上の場合は、保健婦または看護婦を置く」という通達はあるものの、児童福祉法で配置基準はなく法的根拠がない状態である。

東京都 23 区は、平成 18 年度から都の基準が廃止され各区の方針に任されるという変遷期にあるが、配置率は約 7 割弱と、全国平均より高い。そこで本研究では、看護職配置が充実している東京都 23 区内の認可保育園における保健活動の実態と看護職の役割を把握することで、看護職の重要性・必要性を明らかにすることを目的とした。

方法

0～6 歳児の人口に比例して各区にサンプル数を割り当て、財団法人こども未来財団 HP「i - 子育てネット」内の全国認可保育園名簿に掲載されていた東京都 23 区内全 1,071 園のうち 400 園を無作為に抽出した。対象となる保育園に郵送し、返送をもって同意を得た。調査期間は、平成 18 年 11 月下旬から 12 月下旬であった。なお、本研究は、東京大学大学院医学系研究科・医学部倫理委員会の承認を得て実施した。看護職配置の有無で比率の差の検定（フィッシャーの直接確率検定）を行い、有意水準は 5%（両側）とした。統計解析には SPSS 12.0J for Windows を用いた。

結果

1. 対象の概要

124 名から回答があった（回収率 31.0%）。看護職配置は 101 園（81.5%）で、全てが 0 歳児保育実施園で、「保育士要員外配置」は 86 園（85.1%）であった。「看護職は保育業務を行う」と回答した 89 園（88.1%）のうち、看護職がクラス担任をしているのは 13 園（14.6%）であった。看護職未配置の理由は、「区の方針（0 歳児園のみ配置）」17 園（73.9%）、「健康管理・教育は保育士ができる」「医療機関と連携すればいい」各 4 園（17.4%）であった。

2. 保健活動実施状況

1) 園児の健康管理：入園時保護者面接の聴取項目は、「健康状態」が 116 園（93.5%）で、「疾病罹患」（ $p < 0.05$ ）、「予防接種状況」（ $p < 0.05$ ）は看護職配置園（以下配置園）の方が聴取する割合が有意に高かった。年間保健計画は、配置園の方が有意に高い割合で作成していた（ $p < 0.001$ ）。保健記録は 121 園（97.6%）がつけ、記録項目は「けが・病気の発生」（ $p < 0.05$ ）、「病欠者」（ $p < 0.01$ ）、「内服薬・外用薬」（ $p < 0.01$ ）と配置園の方が有意に高い割合でつけていた。園児の健康状態の保護者とのやりとりは、「送迎の際に直接話す」119 園（96.0%）、「連絡帳」115 園（92.7%）であった。

- 2)園児に対する感染症対策：全園で対策しており、内容は「注意事項の掲示」が 120 園(96.8%)、次いで「全園児の既往歴・予防接種のチェックリストの作成」が 109 園(87.9%)、そして「全職員の既往歴・予防接種のチェックリストの作成」が 20 園(16.1%)であった。「全園児の既往歴・予防接種のチェックリストの作成」は配置園の方が有意に高い実施割合であった($p<0.001$)。「注意事項の掲示」「臨時のたよりを発行」は、看護職配置の有無で内容に有意差はみられなかった。
 - 3)保護者からの保健に関する育児相談：「予防接種」($p<0.001$)、「特別な病気」($p<0.05$)は、配置園の方が相談を受ける割合が有意に高かった。保護者への医療機関紹介としては、「医療機関受診の必要性を助言する」が 115 園(92.7%)で実施されていた。「具体的な医療機関を紹介する」は、配置園の方が有意に高い実施割合であった($p<0.05$)。
 - 4)家庭に対する健康教育：配置園の方が有意に高い実施割合であった($p<0.01$)。内容に有意差はなく、機会として「保健だより」($p<0.001$)、「保健相談」($p<0.05$)は配置園の方が有意に高い実施割合であった。
3. 特別な保育形態
- 1)乳児保育：注意点を尋ねたところ全項目に 90%前後の園が回答した。保育開始月齢は平均 3.3 ± 1.8 ヶ月で、乳児保育の約半数が産休明け保育であった。
 - 2)病児保育：4 園(3.2%)が実施していた。「親が迎えに来られないため、事業としてではなくても病児保育をやっているような状態である」との意見もあった。
4. 看護職への役割期待
- 1)看護職がいてよかったこと：配置園に尋ねたところ、「よかったことはとくにない」に回答した者はいなく、看護職がいてよかったことに関する具体的な項目はいずれも高い割合を示した。
 - 2)看護職がいなくて困ったこと：「けが・病気などの対応や医療機関受診の判断」15 名(65.2%)、「調子の悪い児の看病」10 名(43.5%)が多かった。8 名(34.8%)は困難を感じていなかった。
 - 3)看護職に期待する役割：「けがや救急時の対応」「子どもや保護者に対する健康教育」各 98 名(79.0%)が最も多い。配置園の方が「園児の個別性に対応した専門的な看護援助」をあげている割合が有意に高かった($p<0.01$)。
5. 保健活動全般について感じていること：「看護職の配置は必要」「看護職の重要性を実感」が最も多く、「園児が病気でも親が迎えに来られない」、「看護職の専門性の向上を望む」が続いた。

考察

1. 看護職の配置および勤務状況

保健活動に専念できる看護職は少ない実態が明らかになった。十分な保健活動の実施が可能である勤務形態が望まれる。一方で、保育業務を行うことで園児の普段の様子が把握でき、実態に即した保健活動が行えるとも考えられる。看護職が保育を行いつつも十分な保健活動が行えるような、保育園における看護職の業務内容の確立が望まれる。

2. 保育園の保健環境

全体的に保健活動の実施率が高く、熱心に取り組んでいた。しかし、乳幼児の健康を守るには、園児だけでなく、身近で接する職員の健康管理も必要と思われる。園児が病気の際でも保護者が休めないとの意見は多く、病児保育事業はごく一部のみでの実施であるため、事業の推進とともに、保育園内の保健室・在園児対象の病児保育室を設置し看護職を配置する、といった保育園での保健環境の整備も進めていくことが必要である。

3. 保育園における看護職の役割

看護職の重要性の認識と期待の高さがうかがえた。一方では、現状に満足している未配置園もあった。東京都 23 区内の保育園は、未配置園でも保健活動の実施率は高く外部からのサポートが充実しているが、園の内部に日常的に看護職がいると、より充実した、園の実態に即したきめ細やかな保健活動が行うことが可能となる。

看護師の二次的外傷性ストレスと関連要因
Factor Related to Secondary Traumatic Stress of Nurses

56024 長谷川 美由紀

Miyuki Hasegawa

指導教員：上別府 圭子 助教授

Tutor : A. Prof. K. Kamibepu

健康科学・看護学専攻平成 17 年 4 月入学

Admission to School of Health Sciences

and Nursing in April, 2005

二次的外傷性ストレス (Secondary Traumatic Stress : STS) は、外傷的出来事に曝された人から経験を聞いたりケアしたりするなどの職務上の出来事そのものが、援助職者にとってストレッサー (二次的外傷 Secondary Trauma: ST) になる現象である。看護師は職務上、STS が生じやすい様々な状況に遭遇する。そのため看護師の STS の実態を把握し、その発症に関連する要因を探索することを目的とする調査を行った。A 病院の全看護師 338 名を対象に、2006 年 8 月に無記名自己記入式質問紙調査を実施した。有効回答数は 176 名 (有効回答率 52.1%)、年齢は 29.8 ± 8.2 歳、看護師経験年数は 7.8 ± 7.5 年であった。

職務中に ST に遭遇した対象者は、159 名 (90.3%) であり、遭遇する看護師の最も多かった ST は「急変・生命の危機に瀕した患者の目撃やケア」で、主観的ストレッサー強度の最も高かった ST は「中期以降の中絶や死産の目撃やケア」であった。Impact of Event Scale-Revised (IES-R) 得点は 6.9 ± 8.7 点で STS ハイリスク群は 8 名 (4.5%) であった。STS 症状の関連要因を検討した結果、看護師経験年数が短いほど ($p < 0.1$)、主観的ストレッサー強度が高いほど ($p < 0.05$)、IES-R 得点が高かった。また、Stress Coping Inventory (SCI) の責任受容型の得点が高いほど ($p < 0.01$)、IES-R 得点が高かった。

日常業務における、とくに高度医療を提供する施設に勤務する看護師の STS の実態が明らかになった。看護師が ST に遭遇した後のサポートのあり方や、看護師のメンタルヘルス介入について検討していく必要が示唆された。

Key words: Impact of Event Scale-Revised (IES-R) , Nurses, Secondary trauma, Traumatic events, Work related stress

論文の内容の要旨

論文題目 The Effects of At-Home Preparation Program for Surgery and Hospitalization on Adjustment and Anxiety for Japanese Preschool Children and Caregivers: A Randomized Controlled Trial

入院・手術のための家庭での心理的準備プログラムが日本の就学前の子どもと保護者の適応と不安に及ぼす効果：
ランダム化比較試験による検討

指導教員 上別府圭子助教授

東京大学大学院医学系研究科

平成 16 年 4 月進学

保健学博士課程

健康科学・看護学専攻

氏名 涌水理恵

1. はじめに

<研究の背景(欧米)>

欧米では、手術による精神的ダメージが最も大きいといわれる幼児期の患児らに、なんらかの心理的準備を行うという考え方が定着し、入院する子どもと親にプレパレーション(psychological preparation)をはじめとする心理的支援包括的プログラムが提供され、その有効性が多くのランダム化比較試験(randomized controlled trial、以下 RCT)によって検証されてきた。プレパレーションは病院で子どもが経験するマイナスの影響を最小限に抑えるための重要な手段であることが示され、CLS(child life specialist)やHPS(hospital play specialist)によって、各病院で実践されている。

<研究の背景(日本)および意義>

日本では、病院で子どもが起こす心理的混乱や、退院後にみせる一時的な退行(negative behavioral changes)の実態を捉えた研究が少なく、対策は立ち遅れていたが、近年になって、小児科の看護師を中心に欧米で有効性が実証されたプレパレーション技法を模倣した事例研究が盛んに行われている。しかし、欧米において有効

性が示唆されたプレパレーションプログラムをわが国で適用する際には、日本の社会文化的な文脈を考慮したうえでデザインを再検討し、有効性を検証することが望ましい。これまで、手術を受ける就学前の幼児に対するプレパレーション実践の有効性をRCTにより明らかにした研究は日本では見当たらない。日本で、小児外科におけるプレパレーション実践に関するエビデンスを確立するためには、RCTによりプレパレーションの有効性を探索的に検証し仮説を呈示することが必要である。

<日本におけるプレパレーションスタイル>

概して欧米では、子どもを中心としたプレパレーションが医療者から保護者と子どもに病院内で実施されるスタイルが多いが、日本の医療場面では通常、病院で医療者から就学前の子どもへ病状説明を含む直接的・具体的なアプローチは行われず、親が医療者から受けた説明を一旦吟味し、その後、子どもに必要だと判断した内容のみ説明するのが一般的である。また入院中に関しても、子どもが医療者と直接コンタクトする場面は限られており、親を介して医療者とコミュニケーションをとる姿が多くみられる。このように医療場面での医療者－親－子の関係性は、日本と欧米で必ずしも一致しない。

日本では、概して親子関係の結びつきが強く、子が幼少であるほど一般的には親の権限が尊重される。よって日本の文化的背景を尊重すれば、家族を巻き込んだプレパレーションのスタイルが第一に考えられ、“家庭”という安心できる場において保護者が子どもに提供するプレパレーションのスタイルがわが国においては最適であり、かつ医療者にとっても負担が少なく望ましいスタイルであることが考えられた。

<研究目的>

本研究では、医療者指導－親主体の“家庭”におけるプレパレーションが日本の就学前の子どもにとって有効であるという仮説を基に、鼠径ヘルニア根治術を受ける3～6歳の子どもと保護者を対象に、家庭でのビデオ視聴をメインとしたプレパレーションの有効性をランダム化比較試験により検証した。

なお今回研究の対象疾患とした鼠径ヘルニアは、小児外科疾患の中で最も頻度の高い疾患であり、わが国に於ける0～14歳の小児外科の年間手術件数のうち、鼠径ヘルニア根治術の割合は8割以上を占める。

2. 方法

<調査期間・対象>

対象は、2005年10月～2006年2月に、都立A小児病院外科に鼠径ヘルニア根治術予定で予約入院をする就学前の幼児とその保護者とした。なお鼠径ヘルニア根治術に関して、A小児病院ではクリニカル・パスを適用し、入院は1泊2日で、手術1週間前に『術前検査』を、手術1週間後に『術後診察』を実施している。

<介入>

手術1週間前の『術前検査』の時点で、全対象を2群へ無作為に割り付け、対照群には病院で行われている従来のケアすなわち『外来での術前オリエンテーションビデオの外来での集団視聴(1回)』を行い、介入群には従来のケアに加え『各家庭におけるビデオの反復視聴』を小冊子に沿って子どもに行うよう、保護者に依頼した。ビデオは9分に編集されており、主人公として鼠径ヘルニア根治術を受ける5歳の男児、脇役として男児の母、数名の病院(外来・病棟・手術室)スタッフが登場し、患児が手術当日に病院でルーチンに体験する各場面がリアルに描き出されている。小冊子はカラー見開き7頁から構成されており、家庭におけるプレパレーションの介入規程をはじめ、入院・手術に関する子どもへの推奨される説明方法が例示を含めまとめられている。

<データ収集>

子どもの①術前の準備状況、②入院を通しての情動反応(麻酔導入時の様子も含む)、③周手術期のバイタルサイン、④退院後の行動変化、および、⑤保護者の不安をアウトカムとし、①以外のアウトカムに関しては2回以上経時的に繰り返しデータを収集した。

<分析>

統計解析にはSPSS for Windows 12.0Jを使用した。2群比較に関して、属性および特性、また、各時期のスコアの比較には、t検定・ χ^2 検定・Wilcoxonの順位和検定のいずれかを行い、経時変化パターンの群間比較の際には、Baselineスコアを調整したrepeated measures ANCOVA(Analysis of Covariance)を行った。

3. 結果

161組の適格者のうち、158組(承諾率=98.1%)が研究への参加意思を示し、介入群(77組)あるいは対照群(81組)に割り付けられた。

<介入に関する質的な検討>

介入群に家庭におけるビデオの視聴状況を尋ねたところ、平均視聴回数は3.2回

であり(SD=2.4、Range:1-15)、小冊子の規定どおりに視聴した対象は73.6%、またビデオを家庭で一度も視聴しなかった対象は皆無だった。また61.1%が毎回、26.4%がほとんど保護者同伴で視聴し、毎回子ども一人で視聴した対象はいなかった。また介入の満足度を尋ねたところ、91.7%が「満足している」あるいは「どちらかといえば満足している」を選択した。

<各アウトカムにおける介入効果>

子どもの①術前の準備状況では『手術を受ける理由(p=0.004)』『麻酔導入(p=0.029)』に関する保護者から子どもへの説明、『手術を受ける理由(p=0.02)』に関する子どもの自覚、またコーピングとしての『周囲の人との手術に関する(積極的な)会話(p=0.045)』に群間で差がみられた。②入院を通しての情動反応【表1】では、子どもの自己評価であるFace-scaleスコアでは経時変化のパターンに群間で差が認められ(p=0.038)、一方、保護者の代理評価であるVASスコアでは、群の主効果が有意であり(p=0.02)、介入群のスコアが対照群のスコアを常に下回っていた。麻酔導入時における子どもの様子(A)、情緒スコア(B)、協力行動スコア(C)はそれぞれ群間で有意な差はなかったが、(A)および(C)で介入群が対照群に比べ、落ち着きのある(A:p=0.075)、協力的な態度(C:p=0.097)をとっていた。③周手術期のバイタルサインでは『体温』に関しては、経時変化のパターンに群間で差がみられ(p=0.011)、『呼吸数』に関しては群の主効果が有意であり(p=0.005)、介入群の呼吸数は対照群の呼吸数を常に下回っていた。④退院後の行動変化では、有意ではないが群の主効果がみられ(p=0.084)、介入群のスコアは対照群のスコアを常に下回っていた。⑤保護者の状態不安の自己評価であるSTAI-Sスコアでは、群の主効果が有意であり(p=0.02)、介入群のスコアが対照群のスコアを常に下回っていた。

【表1】主要アウトカム - 介入群および対照群における子どもの心理的混乱および保護者の不安の変化 -

アウトカム(レンジ)	時点							介入効果			
	ベースライン* n=150	入院中/手術前 n=150	入院中/手術後 n=150	退院日 n=148	退院3日後 n=148	退院1週間後 n=148	退院1ヶ月後 n=144	群×時間**		群	
	(介=74 vs 対=76)	(介=74 vs 対=76)	(介=74 vs 対=76)	(介=72 vs 対=76)	(介=72 vs 対=76)	(介=72 vs 対=76)	(介=71 vs 対=73)	F***	p	F***	p
子どもの心理的混乱											
Face-scale (0-5)	平均 (SD)										
介入群	1.31 (1.52)	1.30 (1.42)]###	2.03 (1.77)	0.73 (1.05)	0.50 (0.83)	0.30 (0.66)	0.15 (0.46)]#	2.81	0.038	3.78	0.05
対照群	1.12 (1.33)	2.06 (1.89)]###	2.13 (1.81)	0.79 (1.10)	0.61 (0.98)	0.45 (1.04)	0.33 (0.84)]#				
VAS (0-10)	平均 (SD)										
介入群	4.66 (3.00)	5.33 (3.07)	5.81 (3.19)	1.64 (2.30)	1.13 (1.52)	0.56 (1.09)	0.13 (0.25)	0.36	0.820	5.52	0.02
対照群	4.54 (2.65)	5.98 (2.88)	6.36 (3.01)	2.30 (2.32)	1.42 (1.89)	0.80 (1.72)	0.91 (4.03)				
保護者の不安											
STAI-S (20-80)	平均 (SD)										
介入群	44.10 (7.66)	46.58 (8.15)	37.55 (8.40)]###	-	-	32.15 (8.42)]#	30.03 (7.80)	2.11	0.101	5.49	0.02
対照群	45.36 (7.94)	48.16 (8.99)	42.11 (7.54)]###	-	-	33.99 (7.21)]#	30.12 (7.87)]#				

*両群間のベースライン値に統計学的有意差はなし(t-testおよびWilcoxonの順位和検定による)

**群と時間の交互作用の検定による群間での経時変化パターンの違い

***ベースライン値を補正したrepeated measures ANCOVAによるF統計量

##<0.01, #<0.05, #<0.2

4. 考察

本研究の介入遂行状況は先行研究と比較して、総じて望ましい結果であった。また各アウトカムに一定の介入効果がみられたが、その考察として第一に、入院・手術に関する今回のオリエンテーションビデオに、プレパレーションツールとしての一定の妥当性が得られ、同時に、ビデオ内容の補助的な解説を含んだ小冊子が、各アウトカムの介入効果に付加的な正の影響を与えた可能性が考えられた。欧米でも報告されている通り、幼少期の子どもにビデオという視覚的ツールを用いたプレパレーションはわが国においても有効であることが示された。第二に、「家庭」という安心した空間で、子どもたちは、家族と共に入院・手術体験をモデリングし、信頼する保護者から自らの気質や特性にあった適切な説明を受けたことで、心理的により準備した状態で、入院・手術というイベントに臨めた可能性が考えられた。

アジア諸国の子どもは、見慣れない新しいものを避けたり怖がったりする傾向が強く、他人に対して強い人見知りをすると言われる。このような国民性を考慮し、病院だけでなく家庭でもプレパレーションを行う意義はありそうである。

5. まとめ

「家庭におけるビデオの反復視聴をメインとしたプレパレーション」は、手術を受ける日本の幼児の①術前の準備状況、②入院を通しての情動反応、③周手術期のバイタルサイン、④退院後の行動変化、および⑤保護者の不安、に一定の介入効果をもたらし得るといふ本研究の仮説が提示された。

家族看護学教室 教室員 (平成 17 年度～平成 18 年度)

名誉教授 杉下知子
助教授 上別府圭子
講師 山崎あけみ
非常勤講師 鳥居央子
法橋尚宏
清水敬生
星順隆
岩田力
助手 松井典子
尾関志保 (平成 18 年 4 月～；～平成 18 年 3 月客員研究員)
技術官 秋山照男
教室事務 浅野万里子
教育でお世話になった先生方 (五十音順, 敬称略)
五十嵐隆 関根孝司
井田孔明 武村雪絵
岩田 力 竹永和子
岩中 督 橋都浩平
北原良子 堀 成美
杉山正彦 水口 雅
鈴木久美子 箕輪秀子

大学院生 博士

涌水理恵
近藤佳代子
古田正代 (平成 17 年 10 月～平成 18 年 6 月休学)
池田真理 (平成 18 年 4 月～；～平成 18 年 3 月客員研究員)
上野里絵 (平成 18 年 4 月～；～平成 18 年 3 月修士)
岡崎佳織 (平成 18 年 4 月～；～平成 18 年 3 月修士)
小林京子 (平成 18 年 4 月～；～平成 18 年 3 月修士)

修士

長谷川美由紀
佐藤伊織 (～平成 18 年 3 月休学)
陳俊 霞 (平成 18 年 4 月～；～平成 18 年 3 月外国人研究生)
小西美樹 (平成 18 年 4 月～)
藤岡 寛 (平成 18 年 4 月～)

卒論生

相場 繁 (平成 18 年度)
中村奈央 (平成 18 年度)
村上慶子 (平成 18 年度)

客員研究員

大谷尚子
内藤直子
大嶺ふじ子
河田みどり (～平成 18 年 3 月)

北野（下平）和代
渡邊久美
池田智子
松本和史
細坂泰子
研究生 及川裕子（～平成 18 年 3 月）
大西絵里香（～平成 17 年 9 月）
恩田清美
野中淳子
山本弘江（～平成 18 年 3 月）
栗原佳代子（平成 18 年 4 月～）

家族看護学教室年報 第7号

発行年月 平成19年3月31日
発行責任者 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野
東京大学医学部家族看護学教室
Tel : 03 - 5841 - 3556 / Fax : 03 - 3818 - 2950

